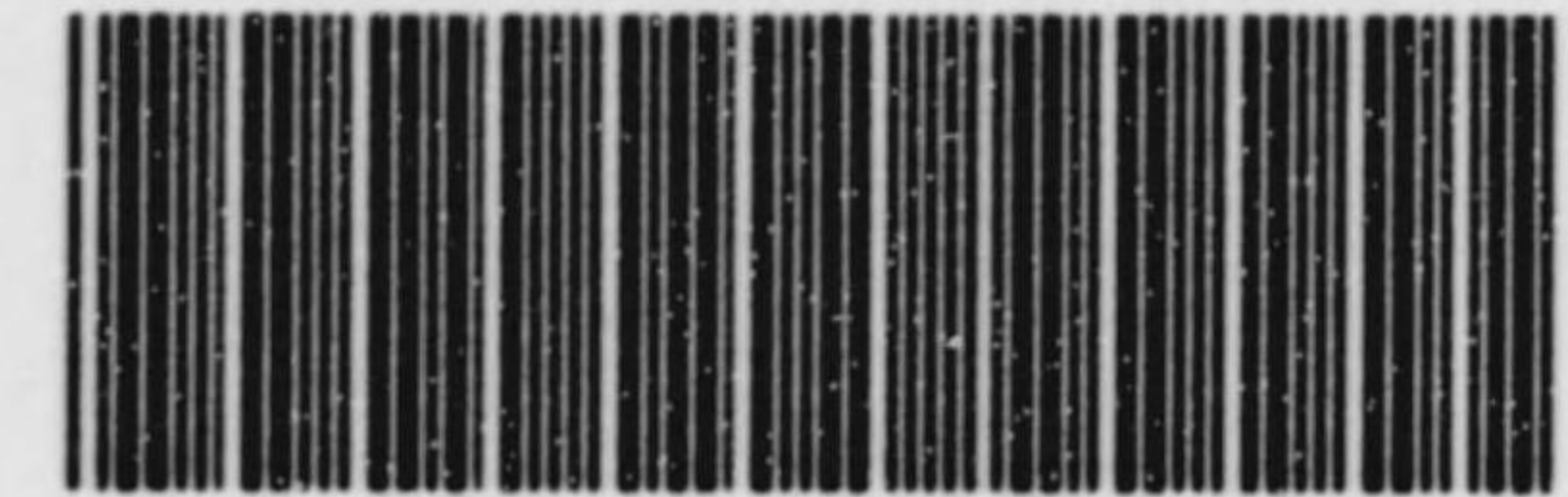


620
143



* 0054537000 *

3

0054537-000

620-143

琉球歌物語

喜納緑村・著

琉球研究社

昭和7

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年5月1
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

36.5.31

290



喜納綠村著

琉球

歌

物

語



自序

さら／＼と流れる、小川邊に咲く、ユーナの黄花、眞紅に空を彩る 佛桑華、それらは、南國の夏を如實に語る。

眞青な大空、美しく澄みきつた海原、そこには丈なす漆黒の髪を無雜作に束ねた、島の乙女等が、軽い芭蕉衣に、頑丈な身を包み、日中の炎暑を忘れて、月明の夜を、そよ吹く風に歌つて居る。

絶海の孤島琉球は、實に詩の國であり歌の島である。
彼女は、うるはしい、自然をうたひ、人生をうたふ。而して彼女等には、歌を作ると云ふ事は、歌ふのと一つであり、更に三味線に合せて歌ひ、且つ踊る。

我山原習のいきやばかりしやべが
引きめしやうれ歌やのすてしやべら (宇地泊節)

(山原とは、琉球の北部、現在の國頭郡のことである。首里政府の役人が、王朝時代山原の乙

女に、歌を詠じて見よと云ふたのに對しての返事の歌である。
自分等には歌を詠するなどと云ふ、むつかしいことはわかりません。兎に角三味線を御ひきなさい。それにつれて歌ひませうの意。)



琉球の歌即琉歌は、和歌が五七五、七七の三十一字詩に比し、八八、八六の三十字詩である。この三十字詩は、どんなものでも、三味線に合わせて歌ひ、且つ踊ることが出来る。
詩は自己の感情を偽らずに、端的に語る。嬉しきにつけ、悲しきにつけ詩はそこに創造される。
藤原鎌足は安見兒を得た、戀の勝利に際して

吾はもは安見兒得たり人みな
得がてにすてふ安見兒得たり (萬葉集)

(はもは共三字に感動詞である)
と詠じて居る。琉球の詩人は

無藏一人がゆへに親までもかなしや
庭のませ垣の匂のしふらしや (すす節) *五夏 舞う照*

(や門は家門で、かぶき門を云ふ)

戀人の旅へ出でたゝむとする折

君が行く道の長手をくりたゝみ
焼き亡ぼさん天の火もかも (萬葉集)

(これは茅上娘子の愛人宅守が、越前の配所に送られんとする時の歌で、いつ會ひ得るか、生きて再會さへ、期し難い悲しい別れであつた。
君が流されて行く、長い道をくりたゝんで、焼き亡ぼして仕舞ふやうな、天の火があればよいがの意)

明日からのあさて里が番のぼり
瀧ならず雨の降らなやすが (恩納節)

(琉球の女流詩人恩納なべが愛人の首里への番のぼりに際して惜別の歌、本文参照され度し)
玉黄金なし子等よく使用されて居る。

歌は赤い葉を持つこはすの木は、美御殿と向き合つて居るが、丁度その様に可愛い里は私と向き合つて居る。如何にも相對して、戀の歡喜を享樂して居ることが、無邪氣にうたはれて居る。
傾く月を眺めては

彼の子ろと寝ずやなりけむ旗薄

浦野の山に月片寄るも (萬葉集)

頼む夜やふけて音づれもなひらぬ
獨り山の端の月に向て (仲間節)

戀人に會へぬつらさを

行けど行けど逢はぬ妹ゆへ久方の
天の露霜にぬれにけるかも (萬葉集)

(久方は天の枕言葉)

七や門や越て九門にむぢも

約束の無藏やあてもないらぬ (謝敷節)

(無藏は可愛の意で、男より女を呼ぶ愛稱、妹又は吾妹子にあたる。無藏一人を得たら、その親までも可愛い、それ許りでなく、庭のませ垣の匂ひまで香ばしいの意)

戀人同志相會して

兒毛知山若楓のもみすまで

寝もと吾はもう汝は何どか思ふ (萬葉集)

(兒毛知山は山の名、その山の若い楓が、紅葉するまでも、一緒に寝て居たいと思ふがあなたは、どう思ふかの意)

赤さこはですや美御殿とたんか

玉黄金里やわ身とたんか (赤さこはです節)

(こはですは木の名。美御殿は王族たる按司、以上王子東宮の御殿のこと。里とは女より男を呼ぶ愛稱、せこにあたる。玉黄金は玉や黄金で、何物にもかへ難いものであるから、玉黄金里は大そう愛する里の事。玉黄金無蔵、



私共は遺されたる、是等の三十字詩を味ふことによつて、彼等の思想、感情、環境等を知ることが出来る。

然しながら、時代の浪は恐ろしいもので、明治以後に生れた我等には、我等の郷土の言葉さへ、理解し難いのが多くなつた。

最近琉歌が、全く打ちすてられて、恰ど一顧も與べられぬのは、之等に原因するのではなからうか。

私は是等を取り出して世の中に送り出し度い。そして三十字詩を通じて、過去の琉球をながめて見度い。そう思つた私は、その歌を生むに至つた、作者を中心とする、情話を、琉球全島にわたつて、その土地々々で集めることにした。それが琉歌を味ふに、尤も都合がよいと思つたからである。

▲本部按司の愛に生れた仲間節の

わどやちやうもわどのまゝならぬ世界に

あれよ恨めゆるよしのあるい

の歌は、女敵の心さえも、やわらげた。

▲忍ぶ戀路の露見から、首里城東敷名のユツクキノヒラで、斬られた 愛人インタルー幸地里之子の跡を追ふて、

しのびあらはれの我身ひちゆいあらな

花までも美腰ひちゆらとめば

の辭世をのこして、腓城から身を投じた、王女の悲しき戀物語の首里節は、それにまつはる歌、數首と共に、古琉球首里城内の秘密を語つて居る。

▲組踊大川敵討の合作者であり、一番科學の、合格者である、神谷を蹴落する爲に作られた汀洵節

▲英國人との戀のローマンズの南山、高嶺間切眞榮里に傳はる「海やからあ」の話

▲去られ行く姑の家で

なれよなれ茄子すとの家のなすび

ならなしゆてなすび嫁名立ちゆめ

と歌つて、姑の心を和らげ、姑嫁の仲が睦じくなつた宇地泊節の話

▲當時の絶体的權力たる奉行の前で、大膽な戀を歌つた、本部間切伊野波村北谷屋の眞牛金の百名節

眞牛との惜別に彼れの愛人の歌つた伊野波節

▲寵を側室に奪はれて歌つた王妃の邊野喜節

等琉歌に關する情話三十余種、興味津々として酌めども盡きぬ南國的情趣豊かなものがある。

是等は偽らざる、過去の琉球の社會縮圖で、又民衆生活史とも云へるのである。

▲私は情話のある土地へは、必ず出向いた。彼の伊野波の石くぶり（山間の石小徑）へは去月わざ／＼

訓ねたし印象のうすくなつた、許田の手水、萬座毛、恩納松下等へは今月音づれたりして、本稿を書

き終へた。

此書に盛る内容は、恰ど口碑である。従つて史實と異なるものもないではないし、一首の歌に二三異

なつた情話もある。之等は何れもそゝまゝ採録してある。歌は琉球王朝時代のものゝみを採録してある

が、引用した琉歌は三百首に近く、優秀なる琉歌は、恰ど網羅して居るといつてよゝ。

且つ琉歌を初めて研究する人々の爲に、琉歌の、鑑賞方法から、讀方意譯及び琉歌に關する限り、場所時

代故事來歴等詳細に説明してある。

殊に難解として棄てられてあつた古歌に對しては、色々の方面からわかり易く解釋したつもりである。

然し著者は元より學者ではない。本著は手で書くといふよりか、足で書いたといふのが事實で、本書脱

稿するまでに二三離島を除く外沖繩縣内にして、未だ足跡の至らぬ處はない程である。



▲私は琉歌と和歌とは姉妹の關係にあるものと思つて居る。左に和歌を翻譯したと思はるゝのを、掲げて参考にしやう。

○

如何にせむ頼むかけとて立ち寄れば
なほ袖ぬらす松の下露 (和)

松の下露によくど袖ぬらす

頼むかけともて忍でいけば (琉) 仲間節

○

命よりまさりて惜しくあるものは
見はてぬ夢のさむるなりけり (和)

○

命よりまさりて惜しさあるものや

見はてらぬ夢のさめていきゆす (琉) 述懐

○

常盤なる松の緑も春くれば

なほひとしほの色増りけり (和)

常盤なる松のかはることないさめ

いつも春くれば色どまさる (琉) こてい節

○

冬ながら空より花の飛びちるは

雲のあなたは春にはあらめ (和)

冬にのが空や花のちり飛る

若しか雲の中春やあらね (琉) 久仁屋節

○
月見れば千々にものこそ悲しけれ
我が身一つの秋にはならねど (和)

○
のがすどく我身にもよ思はしゆる
よそもながめよる月どやすが (琉) 仲間節

○
きりぎりす痛くな鳴きそ秋の夜の
長き思ひはわれにまされり (和)

○
あまりどく鳴くな野邊のきりぎりす
まさる身がつらさ知らなしちゆて (琉) 述懐

○
浅みどり糸よりかけて白露を

○
玉にもぬけるはるのやなぎか (和)

○
みどりさしたへる青柳糸に

○
露の白玉やたがすぬきやが (琉)

○
年たけて又越ゆべしと思ひきや

○
命なりけり小夜の中山 (和)

○
思きやけもすらぬ年の寄て渡る

○
仲島の小紅いのちさらめ (琉) 仲村柄節

◆
私が本書を公にするに當つて、書かねばならぬのは、私の父朝興の事である。父は琉歌に興味を持ち、嬉しき時も、悲しきときも琉歌を讀んでは、私共に見せたり、聞かせたりして居た。私が琉歌に對し

て興味を持つやうになつたのは、それが爲である。父は家庭的には恵まれなかつた。若くして、両親を失つた父は三人の男の子を持ちながら、親らしい幸福を十分味はふ事は出来なかつた。私の妻が名護町宇安和にしばらく教員をして居た關係から、晩年はすつと同地に住まつて居た。

あかつきし
曉ゆ知らず鶏の志なさけや

六七十なての今ど知ゆる

浪の聲やならす瑟の音のことに

聞なきな夜々に寝るが嬉しや

波風も立たぬ戀し山原に

静かもてなしゆる我身の心

素立てたる情けあだなさぬごとに

咲出たる菊の花のきよらさ

然し父の友達は、次第々々に死んで行つたので、淋しがつて居た。

友の居るまぎりあの世先いまふち

我身や山原に一人のこて

殊に親しくして居つた、譜久山朝宜氏の逝去には、可なりショックをうけたらしく

兄弟とてやり頼む友も失やい

我身や綱なしの小舟ごころ

米の祝までや互にされんでの

い語らひも忘てあの世まふちやめ

一貧乏士族の二男に生れた、喜納家の創設者は、苦學をして評定所の科擧に合格し、二代目も亦つゞけて之に合格した。がしかしその後三代、四代父迄、爲す事もなく過してきたと、父はいつも歎じて居た。父の相續後、地頭所が恩納間切山田村に變更されたので父は山田と、姓を改めるやうになつたが、私は

叔父の養子にいつて喜納を名乗るやうになつたのである。
 父が山原を引き上げて、惠まれざる生活をして居る、私の家で七十四歳の高齢ではあつたが、母と私にまもられつゝ、淋しく死んで行つてから、満一箇年の月日がたつて來た。私のこの稿も丁度今日で脱稿する。明日の一週忌のさゝやかな祭壇に、父の好きな琉歌に關するこの著書を捧げることは、せめてもの慰めである。



本書琉歌中には、讀みにくいのがあるので、片假名を付してある。
 篇中何節としてあるは、三味線であつたふときの節の名である。
 本稿を草するに當つて、重に伊波先生の古琉球を参考にしてある、各地方行脚の折心よく話して下さつた諸氏、並に教へを乞ふた先輩諸氏に、心からなる感謝を捧げる。

昭和六年八月九日ユーナ花咲く
 那覇市前島の寓にて

喜納緑村

目次

一、琉歌の鑑賞……………一

二、本部按司の愛……………仲 洵 節……………一〇

三、王女の戀(俳城悲話)……………首 里 節……………一七

四、伊集の花……………邊 野 喜 節……………三七

五、我無藏見やがな……………大 兼 久 節……………六六

六、江洲の種探(アカマター奇聞)……………首 里 節……………三〇

七、眞黒かんぢ……………全 上……………三六

八、謝敷宮童(眞玉橋の人柱後日物語)……………謝 敷 節……………四〇

九、北谷眞牛ぢやね……………百名節。伊野波節……………四七





一〇、妻の亡霊……………伊野波節…番
 一一、海やからあ……………弄
 一二、伊舎堂前の三本榕樹……………弄
 一三、よーや思鶴と蠅螂……………干瀬節散山節…六〇
 一四、伊平屋の無藏水……………空
 一五、つれなき夫……………かぎやて風…六七
 一六、乗船指名……………六
 一七、ふたがちやの御代……………七〇
 一八、前妻の手……………七九
 一九、無情な菊……………散山節…八一
 二〇、よだつ外して……………本部長節…八四

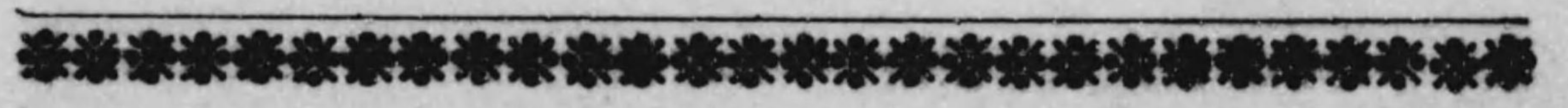


二一、大新城……………かぎやて風…六
 二二、げらいを座敷……………長伊平屋節作田節…七
 二三、尙泰王の心持……………六
 二四、忘れ草……………一〇
 二五、わ玉黄金……………長伊平屋節…一〇三
 二六、姑の家の茄子……………宇地泊節…一〇五
 二七、里や見らぬ……………瓦屋節…一〇七
 二八、一のかいち二かいち。附イツチク、タツチク……………打豆節…一〇
 二九、久良波のろ殿内……………一三
 三〇、與座川のいほ……………一七





- 三一、伊江島哀話……………一九
- 三二、北山くづれ……………三
- 三三、神谷と丸目かな（神谷の逸話）……………三三
- 三四、許田の手水……………一三七
- 三五、久米島乙女……………一四〇
- 三六、萬座毛……………一四三
- 三七、花の島……………一四四
- 三八、雨やどりして（琉歌と地名）……………一四四
- 三九、古歌をたすねて……………一六
- 四〇、教訓歌解釋……………二〇三



歌の鑑賞

私が本書に關する調査で、國頭郡を旅行して居るとき、一有識者から、こつといふ質問をうけた。

三重城に登て手巾持上れば

早船の習や一目と見ゆる

と云ふ歌は間違ひで、下の句は

早船の習やはるがきよらさ

でなければならぬ。若し前歌の通りであれば、一目しか見へないから、沈没して仕舞つて居ると、説く者が居るが、どつちが、ほんとであろうかといふのであつた。

私は一寸意外に思つたが、こつといふ答へをした。

歌は情に出發するもので、何處迄も情緒的な、無制限的な表白である。それを智的な制限的な表白に終れる散文を解釋するやうに、せいげんてきに説かれると、頗る作者が迷惑する。

歌を直譯すると「那覇港頭の三重城に上つて、手巾を持ち上げると、速力の早い船は、一目しか見へな

「い」といふ事になる。手巾を持ち上げると、一目しか見へない。成程沈没して居ることになり、

三重城に登て手巾持上れば

早船の習やはるが清さ

でなければならぬことにならう。はるは走るで、清さは美しいと云ふ意である。

之は歌と云ふものを、前述の通り智的に、制限的に解いた結果である。詩と云ふものは、言葉の経済である、エドガア、アランポウは云つて居るが、名言である。

此の歌は旅に出て行く人と、名残を惜しむ歌で一目と見ゆると云ふのが、この歌の生命である。これが爲に、この船に乗つて居る人が、作者と尤も深い關係に置かれて居るのがわかる。多分戀人同志であらうと迄思はれる。

今日の蒸氣船でさえ、那覇の棧橋を離れて、水平線に没する迄には、一時間以上を要する。

昔の事で帆船のことである。いくら順風であつても、二三時間を要した事であらう。

その長い時間をさへ、一目としか感じない作者の心持いつまでも、戀しい人の乗船を見詰めて居度

いといふ情緒から、生れた言葉である。

又手巾持上ればといふて居るが、只持上げた許りでなく、振つて居るのはいふまでもない。

船が見へなくなる迄、いつまでも、手巾を振つて居る。愛する人であればこそであつて、愛の存ぜ

ない仲であれば、直ぐ疲れて止めるであらう。

疲れも思はず、然も此の長時間を、一目と感ずる處が、作者の情緒あふれて、價値あるところである。

この價値あるものを、變更すると、此歌の生命を奪うことになると云ふ意味を話した。ところが聞くところによると、那覇、首里でも、はるが清さと、歌はれるのが多いと聞いて、更に驚いた。揚沉屋久節に

按司添の御船の渡中押出れば

波も押しそひてはるが清さ

(按司はアジと訓じ、爲政者、添はおそひで支配するの意であるが、こゝでは王族である按司の事に解してよからう。按司添の御船が、海上に押し出して行くと、波もその船にそふてしづかに、走つて行くのが美しい。)

おもて花さかち艦に筋ひかち
按司添が御船のはるが清さ

(船が波を押し切つて走つて行くと、へさきに波の花が美しく散り、艦には筋がひいて按司添の御船の走るのは美しいの意)

の二首が出て居る。はるが清らさで、この歌の作者は、按司添とは、あんまり近い關係の人では、なか
らうことがうなづかれる。許りではなく、この二首は單なる寫生に終つて居る。只表現されただけのこ
とであつて之を讀む人の、心を打つ何物も、そこにはないのである。

てんしやごの花やおやぐにしやり御物
もりこ花小花里が御物

(てんしやごは鳳仙花のこと。首里親國の娘等がよく爪に染めて喜んで居た。もりこ花小花は白
く小さい花のさく植物で、茶に入れても飲む。おやぐには首里親國、しやりは敬語である。

八月がなれば遊び月だいもの
あむしやりもあそべわ身もあそば

といふ歌があるが、あむしやりは母の事今歸仁、名護安和邊では、母の事にはあむといつて居
て、敬語にしやりをつける。大宜味國頭邊でもあむしやりの語をつかつて居る。尙ほ、しや
りと云ふ語は、八重山の歌謡に多く使用されて居る。

歌意は鳳仙花は首里親國のものであるし、もいくばなは里のものだ。
若い留守居の妻は、朝の一仕事をすませて、家族と茶を呑んで、世間話をして居る。

首里の殿内に詰めて居る夫の事は、しばらくも忘れるひまのない彼女であつた。田舎から地頭
主の殿内への奉公は

墨習や妻やないぶしややあすが
殿内づめ三月宿の一月

(學問を習ふ人の妻にはなりたくはあるが、其人達は皆首里に行く。一月うちに居れば、三月
は留守でさびしいからいやだの意)

此の首里詰に行くのが、恩納なべの歌の番上りである)
との歌に見るやうに三月も留守を守つて居るのは寂しいことではあつた。

ふと眼を庭にやると、夫の植えた鳳仙花が、紅白色とりぐに、笑つて居るし、もりこ花が眞白く咲いて居る。はでやかな鳳仙花を見ると、直ぐ夫が御土産にと、首里に持つて行くことを思ひ出し、爪紅に染めると云ふ。首里親國のことが頭に浮んだ。

そして、そこに勤めてゐる夫が好きな、もりこ花は如何にも、純情そのものゝ様に、咲いて居るではないか。

今でも夫が歸つて來たらどんなに喜ぶだらう。妾はまたどんなに嬉しいことだらう。

そこに、あの歌が生れたのであらうと想像される。おやぐにしやりで田舎の人の詠歌といふことがわかるし、里前といふ言葉で主人公が女であることがわかる。里前御物と殊更に強調してあるので、今夫が一所に住まつて居ないことがわかる。一所にをれば、花まで所有主を區別して、誰のもの、彼のものとする必要はない。只美しい花だと眺めて居ればよいわけである。居ないで、朝に夕に戀したつて居るから、直ぐ夫のもの又夫が親國へ、上げるものと云つたのでかく詠したので、之が人間感情の赴くところである。

琉球の田舎では、庭に花樹を植えてある處はいたつて少い。數年前著者が、國頭郡にゐた頃、

白百合を植えたら、そんなもの植えて何になりますかと、質問されたり、ツツジの花を生けると、不思議がつたりしてゐた程で、それは野山に行けば、いくらでもあるからではあらうが、兎に角一般農家が、庭に對する態度は頗る無頓著であつた。

庭に花でも咲いてゐる家なら、先づ教育のあるもの、中流以上の家庭である。

王朝時代のことであるから、之はどうしても一般庶民階級ではなく、當時の智識階級たる黒習や即ち首里勤めして居る者だと推察したわけである。

勿論歌詞そのものから、自とそれがわかつては居るが、之は私の感じたことを述べたに過ぎない。

歌詞中もりこ花と、たゞんだのは、歌の調子をなだらかにした處であるが、それよりも作者の感情は、もりこ花と、うたはねばならなかつたやうに思はれる。

序に云ひ度いのは、古歌には言葉の省略や添へられたのがある。之は和歌と異つて、枕言葉といふのがない關係もあるだらう。例へば

今日のふこらしやなをにぎやなたてる
蕾でをる花のつゆちやたごと（かきやて風）

（つゆいちやたごのいが省略されて居る）（歌意は大新城参照）

いちごさんまろや中城たみちがけ

から屋奉行なとて御扶持すでら（瓦屋節）

（ごさまろでんが添へられて居る。（古歌をたづねて参照）

大西のこてやなさちやならどすきゆる

わすた若ものや花どすきゆる（こてい節）

（なざちやならは草の名でなざちやでならが添へてある。（歌意古歌をたづねて参照）

其他可なりこんな例がある。本旨に立ちかへつて、兎に角歌は、このやうに愛に出發し、感ずるまゝに、いつはらずに、打ち出したのが、藝術として、詩として貴いものである。

いくら美辭麗句をつかつても精神のこゝにいたらぬものは、單なる韻文に終る。

そしてこの歌を見る人は、その歌を通じて、其人の思想、生活までも分るのが尤も價值があるこの作者が、寂しくはあるが、又花に向つて、慰さめられてゐるところは實によい。

恩納嶽あがた里が生れ島

森も押しかけてこがたなさな

之は琉球女流詩人恩納なべの歌である。歌意は恩納嶽のあちらは、愛人の生れ故郷である、森も押しかけて、こちらになさうとの意である。

愛人に對する熱情のほとばしりが「森も押しかけてこがたなさな」の表現となつて居る。

前述の如く詩人は自己の感情を偽らずに、端的に打ち出す。そして廣く自己の見るものを感じて行く、その上溢るる愛と熱情と確信とを持つべきである。

今一つ恩納なべの歌に

恩納松下に禁止のはひのたちゆす

戀しのぶまでの禁止やないさめ

といふのは、よく人口に膾炙してゐるが、恩納松下に禁止の札が立つてゐる。然しながら、懸路まで、せき止めることは出来ないといふ意味である。

恩納松下は、亭々なる老松樹が立つて居て、今も昔をしのぶ事が出来る、元の恩納間切番所が今の國頭郡恩納村役場になつて居て、役場の掲示板が、矢張り松下に立つて居るのも面白い。

厭迫に對する反抗、それらに燃ゆる感情を、端的に打ち出した處が、歌として尤も優れたところである。正義に對する愛、不正義に對する反抗、之等も亦詩歌の要素であらねばならぬ。

私は以上の歌によつて卑見を述べ、琉歌の鑑賞に就いて一言したつもりである。

之は然し、琉球歌のみならず、和歌、俳句、詩等にも押し及ぼすことが出来ると思ふ。

二、本部按司の愛

「今お話したやうなわけで、あつちを斷つて行かないといふことも出来ないのだから、この裏座で、妾が歸つて来るまで、待つて居て頂戴。妾何とかして、早く歸つて来てよ」

そう云つて、女がそくさとして出て行くと、若い本部按司の胸はかきむしらるゝやうに苦しかつた。

隣室からは、男女のさんざめきや、三味大鼓の音がして、遊廊であるだけ、獨りぼつねんと、行燈に向つて居ると、云ひ知れぬ狐獨のさびしさが、ひし／＼と感ぜらるゝのであつた。

按司はその頃、未だ部屋住みの身であつた。ふとしたことから、つるといふこの女をよぶやうになつてからは、せつせとその女の許へ通つて居た。

女も按司のやさしい心持に、愛着を感じてはゐたが、金の生る木の、船持の男を退けることは、彼女の生活上出来ないことであつた。今宵も那覇港に、淀泊して居る船中で、宴會があるので、女はそこへよばれて行つたのであつた。

女は待つても／＼、なか／＼歸つて來なかつた。

「自分はこのなかに彼女を愛して居るのに、こんなにぼつねんと一人寂しく待つて居るのに、彼奴はこちのこちのことを忘れて、よい氣になつて、遊んで居やがる。いまましい奴だ。」

按司はとう／＼憤怒の情を制しきれず、荒々しく吐月峯をたゞいた。

「だが然し、部屋住みの身の悲しさは金をやることさへ出来ないのだから、矢張り女は生活費を稼がないといかぬのだし、尾類の身であつて見れば、これも仕方ないことだらう。さうだ自分だつて

按司は大きい吐息をついた。

「この若い身で、こんなに放蕩三昧をしてはならない。よし他の人等のやうに、努力せずともあとは本部間切の領主になる特権階級であるだけ、尙更修養をせねばならぬ身だ。毎夜もこんなに仲島に通つてはならない。と思ひつゝも矢張り夏の虫のやうに、この家の灯を慕て来てゐるではないか。」

按司は感に堪えぬやうに、じつと座つたまゝ、じじと燃ゆる灯をながめて居たが、行燈を引きよせて黒痕鮮かに一首の歌を書いて立ち去つた。

わどやちやうもわどのまゝならぬ世界にあれよ恨みゆるよしのあるい。(仲間節)

(我が身でさへ、我が身が自由にならないこの世の中であるのに、彼れを恨む理由があらうか、理由はないのであるの意)

船で酔ふて、女をつれて、おそく仲島に歸つて来た彼の船持の男は、翌朝眼をさますと、行燈に一首かゝれて居るのに気がついた。いはすとも、女敵の本部按司の歌とうなづかれた。彼れはくりかへし／＼この歌をよんで、按司の心持がすづかりわかつた。

人間らしい按司の心持が、春風のやうにふんわりと彼れの心を包んで仕舞つた。

そして今迄ねたましく、にくらしかつた按司に急にあつて見度くなつた。

その夜女にいひつけて女の名で按司を呼び寄せて饗應させ、そこで按司に對面し、どうぞ主従の約束を結んで呉れと願つた。

「私のやうな部屋住でありながら、放蕩三昧に暮す男に、奉公してもつまらぬではないか。」

と承諾しなかつたが、男の熱心から、とう／＼こゝで主従の約束が出来た。

すると男は云ひ出した。

「私はつるとは今日かぎり、斷然手をきりますから、つるは、あなたでおよび下さいますやう」

按司は手を振つてさえぎつた。

「主従の縁を結んだ以上、元より二人でこの女をよぶといふことは出来ない。私には女の生活をさゝえて行く力がない。私が手をひくのが當然だ。」

按司はせつなさうに然しはつきり云ひきつた。男は打ち消した。

「それはいけませぬ。つるがあなたを心から愛してゐることは私にもよくわかつて居ります。私

は 只金の力で、彼女を引きつけてゐたわけでありませう。今日から、あなたは私の旦那様です。金は私が如何やうにでも致しますから、つるは是非あなた可愛がつて下さい。

私はつるに頼んでつるの好きな女をよぶことにいたします。」

手をたゝいて、つるを呼んで今までの話をしてきかせ、つるのとりもつた、他の美しい女をよんで、賑かな宴會をして、主従のかためをしたとのことである。(按司は王族で、毒形金簪をさして居た。本部按司とは本部間切の地頭である。)

本部按司の歌は仲村柄節に出て居る。

浮世馴れそめのわが心なげな

しづかもてなしゆる年のらめしや

(世の中に、いつも馴染んで来た私の心も、近頃静観し得るやうになつた。がしかしこれも年の加減であらうと思ふと、遺憾である)

ともに眺めたる夜半の面影や

いつも有明の月にのこて

(夜明けの月を眺めると、嘗つて一緒に、夜半の月を眺めた人のことを思ひ出すの意)

空に吹すぐる風だいなす庭の

松に音信もあるよやすが

(空を吹いて過ぎ行く風でさへ庭の松にさら／＼と音づれるのに、あの人の音信がないのはどうしたことだらうか。)

寝ざめおどろきに、誰が袖よとめば
庭に咲く梅のしふらし匂ひ

(ふと眼醒めて見るとよい匂がするので、誰の袖の匂ひだらうと思つたら、そこには誰も居ず

庭にさく梅のよい匂ひであつたの意)

(神谷と丸目かな参照)

思きやけもすらぬ年の寄て渡る

仲島の小疋いのちさらめ

(思ひも寄らず老年になつてから、仲島の小疋を渡つて、花の島に行くことの出来るのは、命があつたからだの意)

此の歌は西行法師の

年たけて又越ゆべしと思ひきや

いのちなりけり小夜の中山(新古今集)

とよく似て居る。

三、王女の戀

王女は花當幸地里之子(俗にインタルー幸地とよばれた人)のことが忘れなかつた。どうして切ない自分の戀を、打ち明けやうかと、惱ましい日を送つて居た。その頃幸地の男振りには、城人の誰彼れれも、想ひを寄せて居るのが多かつた。

王女は幸地が、ひとり花園の手入れをして居る時、侍女を使つて短冊を送つた。

花當の里前花持たちたぼれ

花持たさよりも御身いまふれ

(花當りは花タイと訓じ、花當里之子は正八品で、緋縮緬の赤冠、官服は黒朝である。城中の花園の手入れをする役目で、庶務を總裁處理する政府たる評定所の花當と、諸規則及城中の監督を司る役所である、下庫理花當の二つある。

こゝで花當の里前は幸地里之子のこと、花を持たせて下さい、しかしそれよりも、あなた来て

下さいの意。

幸地はためらつた。然しとう／＼侍女の導くまゝに、奥御殿へ行くと王女は、自分の居間に案内した。王女には、彼女の前に、平身低頭してゐる幸地を齒がゆく思つた。王女は歌つた。

のがすどく里や戀に義理立てる
高さある木垣露やふらね

(何故あんまりあなたは戀に身分の上下などと義理を立てますか、高い木にも露はふるではありませんか。里、思里共に女より男をよぶに用ふ)

二人の戀はそれから人知れず續いて行つた。
正月の元旦朝の御拜(拜賀式)がすんだ後で、急に雨が降つて來たので、幸地里之子はあはて、正殿の軒下(のきした)にかけ込んだ。

(正殿には百浦添と云ひ、構造から唐破風と俗に呼ばれて居る。正殿の周圍は石欄をめぐらし、花鳥を彫刻し正面の左右には、龍柱を建て、美しく飾られて居る。又正殿棟上には、龍頭の彫臺が置かれ

て居る。御殿は始め茅葺であつたやうだが、度々火災があつたので、板葺に改めた。寛文二年尙貞王時代、今から二百六十八年前始めて瓦に改めたやうだ。

正殿は西向きになり、二層の階樓よりなつて居る。元旦には國王正殿に出御、群臣拜賀の儀があつた之を「朝の御拜」と云ふて居た。)

それを見た王女は

あかいす羽御衣やぬれらはもばかり
里が片んちよびぬらすきやこと

(首里節はやしかくれ思無藏やう)

(あかいす羽はアケツ羽と訓じ蛤蜻の羽根のやうなうすい衣服の事、芭蕉で作つた軽い服である。王朝時代の禮服は里之子は黒朝といつて、芭蕉を黒く染めたものを着けて居た。

歌意は里が禮服はぬれるともお髪をぬらしてはの意)

と口づさんで、男への熱愛から、覺えず手にして居た自分の、花染手巾を投じた。一心は恐ろしいもので丁度男の髪に届いた。男は振り仰ぐと、御簾が下がつて居る許りで、愛人は見えない。

玉の御簾や白雲とみなち

内にまいる無蔵や御月見なす

(首里節はやしかくれ思無蔵やう)

(美しい玉の御簾は、白雲と見て、内に御出でになる我が愛人は、お月様に見たてませうの意)

このことが誰れ云ふとなく、城中にひろまつて仕舞つた。不義は御家の法度である。

インタルー幸地里之子は捕へられて、愈々首里城の東、敷名御殿へ上るところ、現在ガンヤのある附近で斬らるゝ事になつた。

王女は父王に歎願した。若し幸地里之子を斬首にするなら、自分も共に死なうとまで云つた。王は國法を無下にまげる事が出来ず、躊躇して居る中に幸地里之子は刑場に引かれて居た。時は刻々とせまつて行く。とうとう王は愛女の願をいれて、幸地助命の決意をして旗を振らせて置いて助命の王命を、早馬で傳へさせた。然しおそかつた。刑執行の役人は、旗を振るのは斬首せよとの合圖であると早合點してインタルー幸地里之子を切つて仕舞つたのであつた。其の場所には其の後、「ユツクキ、ノヒラ」といはれるやうになつた。

ユツクキイとは夜更けとか、日暮れとかの意でなく横意即ち考へ違ふといふ意で助命信號の旗を、斬首の合圖と間違つたことから、誰れいふともなくユツクキイの坂と呼ぶ様になつたといはれて居る。物見台 腓城で、戀人幸地を待つて居た王女は、それときくと

忍びあらはれの我身ひちゆいあらな

花までも美腰ひちゆらとめば (全上節)

(戀忍ぶ仲か露はれて戀人は殺されて仕舞つて、私一人生きて居て何しよう。戀人の作つた花鳥の花さへ咲いて居ては戀人の名折れとなるであらうと思ふと、生きては居られない。)と辭世をのこして、あはれ、くんだぐすくから、身を投じて死んだとのことである。

時の間の嵐ふきゆんでやおまぬ

ませ垣やすらぬわ花ちらち (首里節)

(急に嵐が吹くとは思はず、ませ垣もたてんで、私の花を散らして仕舞つた)

と幸地里之子の妻は長嘆息した。

國頭郡名護町安和では、首里で罪を得た、幸地里之子といふのが逃げて来て安和嶽に立てこもり、山賊生活をして、人民を苦しめて居たが、村民が計略で以つて、亡ぼして仕舞つたといふ傳説と共に彼の靈をなぐさめる爲に、九箇年に一回牛を屠て祭つて居るとの事である。然し私共は二つの傳説を、歌を通じて見たら、自と真相に近いものをつかむことが出来るであらう。

琉球の上代では王女は結婚しなかつた。天かける鳥にも戀はある。王女だつて人間である。赤い血は通つて居る。

籬こまで居ればこゝてるさあもの

押風と共にしのでいらな (首里節はやし里が番所)

(籬は竹や木で作つた目のあらひ垣のこと。

こゝてるさは寂しく又戀しい事。

籬のやうなところにこもつてゐると寂しくてこひしいから、押す風と共にこつそり、忍んで這入りませうの意)

この歌の「忍でいらな」が興深い。そしてはやしは里が番所になつてゐる。番所は宿直の場所である。

この歌は、王女が宿直のところへ、忍んで行くときの歌であることは云ふまでもなからう)

天の根に飛るわしのこまたかも

野原住鳥に下りてそゆさ

(鷲のこま鷹は、鷲の種類の中の、こま鷹といふ意今日動物學では、鷲も、鷹も猛禽類中、たか科に屬して居る。鷲も鷹も共に、古來鳥類中尤も尊ばれて居る。

歌意は天高く飛ぶ、こま鷹も地に下りて來ては、野原に住む卑しい雞にも、連れ添ふと、その頃の王女の戀愛を諷してある)

真物まものさなのぶて圓覺寺えんかくじ見れば
かくれすみ坊ぼくさが手巾てまぎちやげさ

(首里節はやし禪宗王金やう)

(真物まものさなは、首里城しゅりじやう内の物見臺ものみだいである。その物見臺ものみだいに上つて圓覺寺えんかくじを見ると、かくれては會あつて居る坊ぼくさんが、手巾てまぎを振つて居るとの意である。坊ぼくさんと關係くわんけいしてゐた、城人くすくんぢやうのうたであらう。真物まものさなに上つても、今日こんにちではハンタン山いったい一帯いちたいの老樹らうじゆに防さまたけられて、圓覺寺えんかくじは見えない。この歌うたは可かなりに古ふるい歌うたであらう、さなには普通ふつうあざなと云ふてゐる。

西いりのさなのぶて真南風まへむかみ向むかて見れば
ましらごに見ゆる里さとがとのち

城しるの西にしの物見臺ものみだいに登つて、真南まみなみを向むかいて見ると、戀こひしい里さとの家いへが、真白まつしろく見えて居る。

戀人こひびとの家いへは金城かななくすくはうのん方面かたであつたらう、赤あかい瓦葺はらぶきが真白ましろく見へるといふのは變へんだが、新あたらしいモチでも塗ぬつた處ところであつたらう。が然しかし自分じぶんの戀こひしい、懐なつかしい家いへに對たいしては、特殊とくしゆの感かんじがする

ものであるから、敢あへて理窟りくつつぼく考かんがへる必要しつようはあるまい)
今いま一つ仲風なかつう又は赤田風あかたふうと云ふのに左ひだりの歌うたがある。

赤田門あかたぎらうやつまるとも

戀こひしみもの門かどやつまて呉くるな。

(赤田門あかたぎらうはしまつてもよいが、戀こひしいもの門かどはしまつて呉くれるなの意い)
首里城しゅりじやうの外廊ぐわいらく東方とうほう赤田あかたに向つて居る門かどは繼世門けいせいもん又は赤田お門あかたおかどといつて居る。
國王こくわうも非公式ひこうしきの時には、この門かどから出入でいりされるし、大奥おほおくの婦人ふじんも亦またこゝから通つて居た。繼世門けいせいもん(赤田門あかたぎらう)を這入はいると美福門びふくもんで、この門かどは、みもの門かどとも云はれて居る。みものとは美うつくしいの意いである。

首里城しゅりじやうは一度いちどに、出來たものではない。瑞泉すいせん、漏刻ろうこく、右掖うわき、美福等びふくとうの諸門しよもんを有いうして居る内廊ないらくは五百八十余年前ごひやくはちじゆねんぜん、察度王さつたおうが始めて明國めいこくと通じた時ときから、尙巴志せうはつしが三山さんざんを統一とういつした頃ころまでに出來たし、正門せいもん敷會門ふくわいもん久慶門くけいもん(はこり門はこりかど)と、之これに連なる西北せいほくの外廊ぐわいらくは、四百七十余年前よひやくしちじゆねんぜん、

尙泰久王の時、宮古豊見親仲宗根といふ人の設計になる。石壁の出入屈曲して居るのは、屏風から、思いついたといはれて居る。

赤田門即ち繼世門と、之に連なる東南城壁は、尙清王（三二五年前）時代に出来たものである。周圍九町、面積一万八千餘坪、厚さ三間餘、高さ五丈餘の、嚴重な石垣が繞らされて居る。

此の歌に依ると忍んで入るにしても、出るにしても、赤田門とみもの門は通らねばならぬ。赤田門はしまつてもよいが、みもの門はしまつて呉れるなと云つて居るのは一寸變に思はれる。がしかし、赤田門には秘密があつた。

門はしまつても、出入出来るところがあつた。それは門側に溝が城外に通じて居て、そこは別に下水が流れて居るわけではなく、大人でも腹這ひになると、樂に通る事が出来たとの事で赤田門がしまつても、そこからはいらるゝが、出るにも入るにも、みもの門が難關であつたらしい。

「如何な天笠の、鬼立ちのお門も、戀の爲めやれば、あきどしゆゆる」と平敷屋朝敏は、組踊手水の縁に書いてゐるがあの嚴かめしい赤田御門に、この秘密があつたとは、成る程戀路なれ

ばこそである、赤田門の近くに汐平川といふ井戸がある。之が手水の縁のモデルの井つ戸で瀬長山といふのが、その上の岡であると云はれてゐる。

四、伊集の花

王は伊集のあやあと云ふ、側室が出来ると、妃に對する態度ががらりと變つた。明けても、暮れても、側室をそばから、放さうとしなかつた。

勿論、妃の處へは、一寸も近づかなかつた。

伊集のあやあは、ほんとに美しい女であつた。妃は、口惜しかつたが、又伊集の、美しい姿が羨まれた。妃には王の寵愛を奪はれて、あちきない日を送るのは、たえられない事であつた。

かくばかり戀ひつゝあらずば高山の
盤根し枕きて死なましものを

と仁徳帝の皇后は。お詠じになつたが、わが王妃は

伊集の木の花やあん清ささちゆい
わぬも伊集やとて眞白咲かな (邊野喜節)

(歌意伊集の木の花は、あんなに美しく咲いて居るが、妾も伊集の木であつたら、あんなに眞白に美しく咲くものを、と伊集の木と、伊集といふ側室の名が、音が通ふのでかく詠じた)と如何にも琉球の女らしく詠じて居る。

五、我無藏見やがな

愛する人との別れは、いつの世も、苦しさに、かはりはなかつた。何とかして、愛人を自分の腕に、いつまでも抱きしめて、置き度いと思ふのが人情であらう。茅上娘子は

君が行く道の長手ををくりたゝみ
焼き亡ぼさん天の火もがも

と嘆じた。我が恩納なへは

明日からのあさて里が番のぼり
瀧ならす雨のふらなやすが (歌意北谷眞牛参照)

としばらくの別れをも、惜しんで居る。

いつごろであつたかわからない。名護御殿へ、奉公に来て居る、若い男が居た。彼れには美しい、やさしい、許嫁の女が居た。交通不便の昔ではあるし、勤め持つ身の悲しさ、歸りたいにも、仲々かへつて愛人に、會ふことは出来なかつた。

丁度名護番所へ羽書を持つて、行くべき用件が出て、用人は誰れをやらうかと考へた。それを聞くと、男は飛び上つて喜んだ。そして用人の前に、進んで行つて歌つた。

名護の番どころ只今の羽書

わぬもたち給れ我無藏みやがな (大兼久節)

天真爛漫な歌ではないか。我戀人に會ひがてら羽書を持つて行きませう。用事は副になつて無藏に會ふのを、主にした處、とても面白い。

羽書とは、簡単な手紙のことで、封筒に入れんで、手紙の本文を折りたゝんだものゝ事であるし只今はタデーマで、急ぐこと、即ち至急の意である。ほんとうに、自分の心を、打ち出した處、人の心を打つものがあるではないか。

六、江洲の種取

尙泰久王の愛人に、中頭具志川間切江洲から出た、美しい女が居た。王はこよなく此の女を愛した。一日でも、一刻でも、彼女を側から放さなかつた。

そして女も亦王に愛着を感じて居た。

その頃これ等城人(安女の如きもの後宮で御膳のことを司りし女官)には一年數度の宿下りがあつた。其の一日こそは、あらゆる自由が女に與へられる習慣に、なつて居たのである。

女には、他の女等のやうに、浮いた心は、少しもなかつた。只しかし王に愛せられ、復王を愛しては居ても、骨肉に對する愛は別だ。

一年に數度、草深い田舎で、年老いた兩親や、兄弟に會ふのは、嬉しいものであつた。

それは九月の宿下りの時であつた。女は王と、その日の申刻(今の午后四時ごろ)に、歸城を契つたのであつた。竹垣にかこはれた、薄暗い彼の宅には、皆が彼れの歸りをまつてゐた。首里城内の話、村の物語りは、いつまでも續いた。母はしきりに、明日は種取(稻の種子蒔)のことで、農家では御ちさうを作つて、たのしむだからそれまでまつ様にすゝめた。王との約束で、女は歸らねばならなかつた。其の中大きな雨が降り出したので、女はとう／＼母の意に従つて、泊ることになつた。城に歸ると王は、御機嫌斜で

城から下りてさん時のかぎり

たるによこされてなままでまふきやが

(首里節はやしかくり思無藏やう)

(城から村へ行つて、申時には歸つて來る約束であるのに、誰に誘惑されて、こんなにおそくなつたのかと云ふ意。さん時は、申刻で今の午后四時)
女は直ぐに

よこされもあらぬ引かされもあらぬ
至極雨ふてどなまできちやる。

(全上)

(歌意 誘惑されたのでもなく、又心をひかれたわけでもなく、大雨が降つて、こんなにおそくなりしました。)

と返歌を申し上げて、やう／＼龍顔を和げた。其の後江洲では毎年舊九月か十月の二十日前後に、行ふ種取は他村より、一日繰り上げて行ふことになつて居て、若し他村と同日に蒔くと、驚その他の鳥が、稲の種子を食つて、生へないと信じられて居る。
彼女と彼女の息子を葬つた墓は、宇民崇拜の中心であるが、墓中には今に至るまで、一疋の青大將が住まつて居て、清明(舊三月)の頃には、のそ／＼這ひ出て歩くが、これに悪戯でもしたら、神罰立ちどころに至ると云はれてゐる。

◆三月三日

蛇に關する傳説は、沖繩にはまだ外に二三ある。

上巳の節句、即ち三月三日の傳説がそれで、ある美しい娘の處に、花染手巾で鉢巻をした美しい男が、夜な／＼通つて来て、戀の睦言を交して居たが、女は間もなく妊娠した

丁度三月三日のことで、一人の漁夫が、海岸を通つて居ると、岩蔭に、一疋の青大將が、どぐろを巻いて、話をして居る。漁夫がこつそりきくと

甲「僕は君、今度えらい事をしたよ。といふのは人間の娘と戀仲になつて、妊娠させてある。人間に子供を生ませると思ふと、愉快でねえ。生んだら連れて来て君にも見せ様」

乙「そうか、それは偉いや、然し君、人間は惻口だからねえ。若し君、女がそれと知つたら、直ぐ濱下りをして、砂をふむんだらう。砂をふんだが最後流産して仕舞ふではないか。」

この會話を聞くと、漁夫は驚いた、その娘と云ふのは、漁夫の隣の一人娘であつた。漁夫はこつそりそこを出で早速この話を、娘の母に告げた。

母は驚いて娘を連れて、青大將の云ふ通り、濱に行つて、白砂をふませると、果せるかな、數匹の青大將を流産した。それから、三月三日は女の厄ばらひの爲にて、濱で遊ぶやうになつたと傳へられて居る。

◆戀角神

今一つは宮古島舊記にある話で伊波先生が、古琉球にも書かれてあつた、宮古島漲水嶽の話だ。
 平良村の長者の娘の處へ夜な／＼、美しい男が通つて来て、娘は妊娠した。父母はその男を知らうと思つて娘に命じて、麻糸の先に針をつけ男の片髻（男の結ふた髪）に刺せた。翌朝其麻を尋ねて行つたら、漲水嶽の洞穴に行つた。そして二三丈もある、大きな蛇の首に針はさゝれて居た。その夜娘は夢を見た。それは大蛇が枕元に來て

「自分は、宮古島開闢の戀角の神であるが、此島守護の神を、生まうと思つて、お前の處へ忍んで來たのだ。お前はきつと三人の女の子を生むに相違ないが、其子が三歳になつたら、漲水嶽へつれて來いといふのであつた、十ヶ月たつて、女の子が三人生れたので、三歳になつた時、大蛇の言ふた通り漲水嶽へ連れて行つたら、果して恐ろしい大蛇が居た。女は子供等を置いたまゝ氣絶したが、子供等は少しも恐れず、大蛇にはひかゝつた。大蛇は紅涙を流して子供等に口づけした後昇天し、子供等は、御嶽の中に這入つて、宮古の守護神になつたとの事である。

◆ ハブの話

中頭郡讀谷山村字古堅には、ハブにまつまる傳説がある。

古堅の百姓の女が首里へ奉公に出た。彼女は、毎日一里餘の通を、與那原へ、汐汲みにゆくのであつた。或日彼女は汐桶を頭にのせて、丁度ガマガチのあたり迄來ると、茅野がやけて、一疋のハブが、焼け死なふとして居る。女は可哀さうに思つて、折角くんで來た汐を打ちかけて、火を消してやつたのでハブは命を助かつた。女は半里餘の路を再び、與那原へ汐を汲みに、行かねばならなかつた。

その爲に、大分時間が経つたので、主人の宅に歸つたら、道草を食つたのだと、叱られた。女は別に辯解もせず、ハブを助けた話も、しなかつた。意地悪の主人は、彼女に食事を與へなかつた。二三日してから、主人はハブにかまれた。手當をしたので、命は助かつたが、可なりに痛みを覺へた。不思議なことには、下女が主人の前に来ると、痛みは止るが、臺所に去ると再び痛みを覺へた。

主人は不思議に思つて、下女に此の話をして、何か心當りはないかと、尋ねた。下女は驚いてかくさず主人に、ハブを助けた話をした。

主人は下女の心持と、此奇蹟に感じ、身代金を免じ、衣裳その他の金品を與へて、歸村せしめたと云ひ傳へて居る。話が横道に這入つたやうだが

江洲は與那原驛より連絡自動車か、馬車軌道で、泡瀬へ行つて、それから、海中道路約一里、仲喜洲小



學校の上の部落である。泡瀬へは普天間經由那覇より直行自動車もある。
宮古は、那覇の西北一七〇海里の洋上にある島で、漲水嶽は、漲水港頭にある。宮古島は歌の島傳説の島として知られて居る。宮古島の古い歌謡は、伊波文學士が古琉球に紹介されてある。
琉歌集には石んねの道節が出てゐる。

石んねの道節

石んねの道から、寺の側までも、主部衆やさだけて、宮童や後から、漲水におりて、船元に登て、片手しや首抱ち片手しや酌とて、目のしやいや主の前、池間崎見送らへ、肝しやいや主の前浮繩迄送ら

註さだけは先になること。目のしやいやは目では肝しやいやは心ではの意。

讀谷山村古堅は嘉手納驛から比謝江を渡つて三四丁北にある。

七、眞黒かんぢ

尙豊王の父君である、金武のゆ前加那志とよばれて居た尙久は、美しい愛妾を得てから、奥方の愷氣

に、ほと／＼困りぬいて仕舞つた。

尙久自身も、可なりにはげしい性質ではあつた。領地の擴張にしても、不平怨嗟の聲に、耳をおほふて

思ひ切つて斷行した。一野人は

仲間からかいとて久志邊野古までも

金武のゆ前加那志おかけ親島

(仲間からも奪ひ久志邊野古までも金武のゆ前加那志の領地になつて居るの意)

森もへさめらぬたけもへさめらぬ

のよしのあとて間切わかて (恩納節)

(森もへだてゝは居らない、嶽もへだてゝは居らないのに、どういふ理由で、間切(現在の村)を分けますかと不平を歌つてゐる)

のでも知られる。

奥方の性格と彼れとは、丁度互に燃えさかる火と火の様であつた、然し奥方の愷氣も亦熱愛の現はれであ

ることを知つてゐる尙久は、奥方に對しては、いつも下手に出る事を忘れなかつた。
然しそんな家庭生活である程、人形の様に美しい女、自己の思ふままに動く愛妾に、心をひかれるのを、
どうする事も出来ないものであつた。
首里童は歌つて居る。

金武のゆ前加那志乗りめしやいる馬や
爪やあや爪に眞黒かんぢ

(金武のゆ前加那志が、乗られる馬は、美しい爪と、眞黒な立てがみを持つてゐるの意で、
之は愛妾の美しい姿をよんだ歌である。)
その日尙久はとう／＼奥方と申刻(今の午后四時頃)迄に歸邸する事を約束して仕舞つた。申刻は丁
度下城の時間である。昔も時刻と云ふものを厳守してゐたそうで、國王でも遅参されるときには、三
司官其の他へ、一禮をしてことわられをつたとのことである。
然し愛妾の顔を見ずに歸るといふことは出来ない事であつた。夕方歸邸すると奥方は歌つた。

城からおりてさん時のかぎり

たるによこされてなまできふきやが

(歌意、エス 江洲の種取参照)

よこされもあらぬ引されもあらぬ

至極雨降てどなまできちやる

(全 上)

奥方は更につゝ込んで歌つた。

至極雨てすも時の間どふゆる

きやはら降る雨の世界にあるい(首里節)

(至極雨がふるといつた處が、暫くの間しか降らない。一日中降る雨といつて、この世の中にあ
りますかか意)

これは首里にある傳説で、江洲のタントイとは異つて居る。
 江洲の話と、この傳説とを、綜合して考へると面白い。
 尙泰久といふのは、尙久のことではなからうか、江洲から出た美人は、尙久の愛人、眞くろかんちと謳はれた、愛妾であつたやうな氣がする。
 具志川と首里とは、あまり離れすぎると、申刻(今の午後四時)といふのも變なものだし且つ王の歌に「なままでまふちやる」とあり、女の歌に「なままできちやる」もをかしい。
 之は女が歸郷のとき、尙久と奥方との歌問答の話を、親兄弟に話したのが、誤り傳へられたのであらうと思ふ。

八、謝敷宮童

附眞玉橋人柱後日物語

國頭間切の地頭主は、間切内の巡見の旅を續けて居た。春未だ浅い山々には、苺が眞赤にうれたり、赤いつゝちの花が咲いて居た。

與那の高ひらやあすはてどのぼる
 無藏に思なすば車たう原

(歌意、たう原は車の通る様な平坦なところ、無藏は我が戀人、男が女をよぶ言葉である。)

與那の高い坂は、汗を流して上るが、然し無藏であると思へば、何でもない、平坦な處だ)

で名高い與那の高ひら(高ひらは高い坂道の事)を上つて、下りると、謝敷村へと這入るのであつた。そこには、美しい板干瀬があつた。寄せては引き、引きては寄せる波の風情が、北國頭獨特の、面白さがあつた。

領主はハツと我れと我が眼を疑つた。この美しい板干瀬には、美しい謝敷宮童が只一人、領主の巡見をも知らぬげに、ぼんやりと、海を眺めて居た。油を流した様な海には、眞帆片帆が浮いて居た。

領主が近づいて、言葉をかけると、娘はものをも云はず、ニツと笑つた。その姿態が兎ても美しかつた。

謝敷板干瀬にうちやい引く波の

じやしき宮童の目笑齒ぐき (謝敷節)

(歌意、謝敷板干瀬に打つては引く波は美しいが、そこに座つて居る、謝敷の女のニツと笑つた姿態は又美しい)

これが領主の歌であつて、娘は嘔であつたと、云ひ傳へてゐる。

謝敷宮童は、謝敷のものではなかつた。彼れは豊見城間切眞玉橋のもので、父が、眞玉橋の架橋工事の折、人柱に立つた後は、ながれぐて、少しの知るべをたよつて、この土地に来て居た。

琉球では珍らしい人柱とは、こういふわけであつた。眞玉橋は南山と中山を連結する、交通上の重要地点であつたが、工事はなか／＼の、難工事で、建設する一方からは、波に破壊されて、ちつともはかどらなかつた。乙女の父は進言した。

「従業者の中から、七色の元結(ムーテイ)を、してゐる男を選んで、人柱に立てたら、橋は難なく出来るであらう。」

この進言は、直ちに採用され、いよ／＼、七色の元結ひをした、男を調べた。

七色元結ひの男は、間もなく見つかつた。それは進言した男であつたのである。彼れは實に意外であつた、自分が云ひ出して、自分が死なねばならぬ、因果の身をはかなく思つた、彼れは彼れの獨り娘に遣

言した。

「決して、人より先に、ものを云ふてはならない。」

(「人先きもの云ひねえ、うまのさきとゆん」といふ言葉が今も眞玉橋に残つて居る) 娘は悲しんだが、仕方がなかつた。そして遺言を守つて、全くものをいはぬことにした。

領主が嘔と思つたのも、無理ではなかつた。領主は彼女を愛した。彼女も亦彼れを愛した。二人の戀愛は美しい實を結んで、彼女も遂にものを、云ひ出す様になつたといふ、ロマンスを生んでゐる。

諸鈍長濱に打ちやい引く波の

諸鈍宮童の目笑齒ぐき

と云ふ似たのが諸鈍節に出て居るが、歌詞といひ、ロマンスと云ひ、後者の比ではあるまい。諸鈍とは大島の地名である。

謝敷は國頭村字邊土名から約二里程北にある。現今邊野喜小學校區域になつてゐる。

渡野喜屋から邊土名迄は、リーヤーカーの便があるが、それからは是非歩かねばならない。否歩くのが興深い處であらう。

眞玉橋は、那覇から、半里強の地点で、汽車の便がある。眞玉橋字の上の丘は、有名な嘉數もりであつて、那覇市街が眼下に見下される。

湖になちも恥やかゝすもり

瀬田の唐橋のないらぬばかり

(湖とは近江の琵琶湖のことを指す。湖に見立てゝ見ても、決して恥ぢない。只瀬田の唐橋が

ないだけの意で、恥はかゝすもりは恥はかゝぬつもりと、かゝす森とをかけてある。)

緑したゝる松樹の下、美しい芝生がしきつめられて、那覇市街を一時に集め頗る絶景である。明治橋がかゝつてから瀬田の唐橋もできたわけで、日曜等半日を樂しむによい場所である。此の部落は豊見城村になつてゐる。此の豊見城村は元は豊見といつて居たやうだが、南山王汪應祖が、城を築いたので、豊見城と云ふ様になつた。そして彼は南京から龍船の造り方を習つて來て、舊五月四日、城下の

入江で、競漕をさせて樂しんだ。其後爬龍船は、豊見城前に至り、豊見城のろが祭品が供へて、慶福を祈り、乗込員も禮拜するやうになつたと云ひ傳へてゐる。

九、北谷眞牛

田地奉行の、本部間切巡見の日が近づくと、北谷屋の眞牛は、憂鬱な思ひにとささるゝを、どうする事も出来なかつた。

戀しり初めし、美しい彼女と、彼れの戀人には、つるべ落してふ、秋の日さへ長かつた。烏羽玉の暗夜は、村外れの榕樹の木蔭に、さら／＼と音立てゝ流るゝ、小川の水を聞きつゝ、月清き夜は石くびり(山間の石ころ徑)のほとりまで、人目を避けては、戀の陸言をかはして居た。

「お前が若し、今度の白太鼓踊に選まれたら、私ほんとにどうしやう。美しいお前、歌の上手なお前が、一寸免れさうもないし。

男は眞牛の手を取つて、不安そうにさゝやいた。同じ不安は、眞牛にもあつた。奉行が、巡見の折には、白太鼓踊をするのが例であつた。

(ウスタイコには、しのぐともいつて、琉球の上代から、地方における、女子の唯一の娯樂であつた。

あねべたやよかてしのぐしち遊で

わすたよになればおとめされて

(姉さん達はしあはせにも、しのぐをしてあそんだのに、われ／＼の代になつたら、止められて仕舞つた)

と恩納なべが、不平を漏らしてゐるのでも知られる。

このしのぐは、神を祭るに始まつた舞踊で、今も各地で舊七月か八月に催して居る。

尤も古風なのは、國頭村安田のしのぐで、毎年舊七月の、初の亥の日に行ふことになつてゐる。

その日字中の男子は野生のカツラで、鉢巻をして、裸形のまゝに三つに分れて山へ登つて行く。

合圖の大鼓の音と共に、木の枝をかざした、男達は、三方の山から、エーヒーオーの掛聲勇しく下

つて来ると、字中の女性は、みんな所定の場所へ、男達を、迎へて、圓陣を作ると、男達は持參の木

の葉で女等をあふぐ、これが悪魔拂でその木の枝を、近い濱に持つて行つて、みんな海に流す。それ

から、しのぐが始まるのである。私は本年のしのぐの練習をして居るのを、區長新垣清太郎君の案内で、あしやげ庭で、見せて貰つた。

庭の真中には、字青年の寄附になる、タイマツが勢よく燃えて居て、字の乙女等が涼しさうな、

芭蕉衣姿で圓陣を作る。二人の音頭とりの婆さんが、白大鼓をたゝいて歌ふと、それにつれて、乙女等

は一齊に歌ひつれつゝ、手を上げたり下げたりして踊る。

それから、だんだんリズムが早くなると、舞踊の手も足も急テンポになつていく。

風につれ、タイマツの火の明滅と共に、女等の顔が、暗く、白く見へる處等とても古い昔の様になつ

かしまれる。

以前はそれがすんでから、女と男と角力をとらせ、八百長で女を勝たしめて居たそうだ。

首里でも綱曳には、女綱が勝つたら、豊年だと、縁喜を貴んたのと似て居る。何といつても女ならではの夜

の明けぬ、大和民族の支流であるだけ、面白い話である。

そしてその踊子中から、奉行の氣に入つたのはお伽に行かねばならなかつた。

「妾も、それが心配で／＼、たまらないのよ、でも妾どうかして、奉行の、氣に入らないやうにし

て見せるわ。よし踊子にえらまれたつて、何も心配など、しなくたつてよいことよ」
 とは云ふものゝ、會ふ度に、この大きな権力の前に、若い二人は、小鳥のやうに、おそれ、おのゝいで居た。奉行はいよゝゝ到着した。間切をあげての歡待である。眞牛も白大鼓の踊子にえらまれた。若い美しい宮童等は、眞新らしい袍衣かゝんに、揃ひの鉢巻をして、はれやかに踊つた。只一人物思はしげに交つて居る眞牛を見ると、かしら（音頭取りのこと）は即興で歌つた。

北谷眞牛ぢやねが歌聲打ち出しば
 中へ飛鳥もよどで聞さ （百名節）

（北谷眞牛は北谷屋の眞牛のことである。ぢやねは金で、琉球では、敬稱に名の上に、眞をつけたり、名の下に金をつけたりする、更に二者を、併用することもある。これは其の例で、牛に眞をつけて眞牛、金をつけて、眞牛金になつて居る。金はかねとよむよりもぢやねが上品とされて居る。或王様が御話中「鳥ヒインガチ」云々といはれたら、そんな下品な御言葉はいけません「鳥ヒインチャチ」でなければなりませんと、御近習の人が、言上したと云ふ逸話が

ある。尙ほ首里天加那志を首里天ぢやなし、海神をうんぢやみと、いふてゐる。「ヒインチャチ」は逃がすの意である。歌意は、眞牛が歌聲を打ち出すと、よい聲だから空とぶ鳥も止まつて聞きますといふことである。）

眞牛はすかさず

中へ飛鳥やきちやはんよたしや
 かくれ思里がきかばきやしゆが （百名節）

（歌意空飛ぶ鳥は聞いてもよいが、もしかくれ思里が、きいたらどうしますか、かくれ思里とは忍んで會つてゐる男のこと
 大膽卒直にその美しい聲でうたつた。みんなはこれに和して、はやし且つ踊つた。

奉行には、この美しい宮童の、大膽な返歌が、殊に氣に入つた。
 奉行のお伽をする白羽の矢は、いふまでもなく、眞牛にあつた。その夜、眞牛と彼の戀人は、相抱いて泣いた。二人のはかない戀をのろつた。

そして二人はいつものやうに、石くぶりまで、語つては泣き、泣いては語つた。

石くぶりの兩側は、鬱蒼と老木が生ひしげつて居て、月の影さへ漏らなかつた。一人づつしか通られない爪先上りに來ると、男は眞牛の手をとつてはのぼせた。上りつめると、パツと月光が二人の上を流れて、ぐ渡久地の海が眺められた。

そこからは下りで間もなく、石くぶりはふつゝり切れて仕舞つて、下には伊野波田圃がひろがつて、直向ふには、名護本部境の連山が、緑したゝる姿で、月に照らされて居た。二人はそこから、歸らねばならなかつた。

男は血を吐く思ひでうたつた。

伊野波の石くぶり無藏列て上る

にやひん石くぶりとさはあらな (伊野波節)

(伊野波の石小徑を、可愛い女を連れて登つて行くと、石小徑はつきて仕舞つた、もつと遠ければよいが)

(一説には、此の歌はローマンスと違つて、戀しあつてゐた夫婦があつたが、夫がレブラとなり、同棲が出来なくなつたので、實家へ、妻をかへす時、石くぶりでの、惜別の歌だとも云はれて居る) 従來北谷眞牛ば、北谷間切のものと、思はれてゐたが、此のローマンスで、彼れが本部間切伊野波の人であることがわかる。

尤も彼れの祖先は北谷間切から移住して來たとのことで、北谷屋は伊野波に現存して居る。

手巾持上れば餘所のめのしげさ

かしら取名付手しやい招け (花 風)

(手巾を持ち上げて招くと、他の人々に見られて恥かしい、一寸髪に手をあてる眞似をして、手で招いて見送りませう)

浅地そめらはも紺地そめらはも

里まゝどやよるわぬや白地 (本散山節)

(淺地を染めるのも、紺地に染めるのも、それは貴方の心のまゝで、私は白地です。
「あなた任せの妾ぢやないか」の意)

こういふしほらしさが、琉球女性一般の、所謂貞淑さであつた。

その當時の、爲政者たる奉行の前に出て、戀の爲には、権力をも恐れず、大膽にかくれ思里、がまかばきやすが、と歌ふあたり、恩納なべの流れをくむ、山原乙女の性格が、躍如として居る。

かなゆらばよすてくうまきゆらばしちゆげ

わすた宮重のまきて引め (安波節)

(敵ふなら寄せて來い、負けるならたゞきなさい、我々田舎乙女が負けて引き下りますか。)

明日からのあさて里が番のぼり

瀧ならず雨のふらなやすが (恩納節)

(二三日中に、私の愛人は番のぼりで首里へ行く、行き度くないが動めだから仕方がない、里をや

らんやうに、瀧のやうな雨が、降つて呉れるとよいが)

わ山原習やさしまくらなひらぬ

くないてすけめしやうれ松の切くい (安波節)

我々山原の習はしではさし枕(さしものゝ枕)はありませんから、松の切くい(松の木を枕形に切つたもの)で辛抱して下さい。

大膽さ稚拙さ、ほんとうに、萬葉の東歌をよむよりも、胸を打つものがあるではないか。

伊野波は本部村渡久地から東へ、約五六町の地點にある。廣々とした、伊野波田圃を前にした靜かな部落で、こん／＼と清水が湧いて、小さな音を立てゝは、小川となつて流れて行く。

石くびりは、今も雑木が生ひしげつた、うす暗い山峽の石ころ路で、一人づゝしか歩けぬ處が多い。石くびりの盡きる處には笹竹が生ひしげつて、

萬葉の

笹の葉はみやまもさやに騒げども

吾は妹おもう別れ來ぬれば

を思ひ出す。そこからは本部連山が、手を取り合つてならんで居て、下には本部街道が、白線をなして走つてゐる。伊野波には北谷屋といふ家があつて眞牛の子孫であると云はれて居る。眞牛の碗といふ、永樂年製として、赤壁の賦を書いたのが保存されて居る。眞牛の墓所近くでは百名節は、うたはぬ事になつてゐるのも面白い。

一〇、妻の亡靈

石くびりのローマンスを今一つ紹介しやう。伊野波は發音ヌハであるが、石くびりは大宜味村字饒波であるとも、云はれて居る。仲のよい夫婦があつた。夫は首里に奉公に出なければならなかつた。その頃交通は不便であつたし、容易に消息も出來なかつた。

宵も曉もなれし面影の

たゞぬ日やないさめ鹽屋のけぶり (仲間節)

(宵も曉もいつでも戀しい面影のたゞない日はない。鹽屋即鹽たくけぶりの立つのと面影が立つと云ふが相通するのでかく詠じた。花賣りの縁の作者高宮城が上句はよんで下の句を得るまで三年の日を要したといはれて居る苦心の歌である。

の鹽屋から、一里半位ある山間の部落である。

夫はその頃夢見が悪くて、故郷の事が氣になつて居たので、ひまをもらつて、急いでしまへ歸つた。丁度村にのぼつて行く、石くびりまで來ると、片時も忘れた事のない愛妻が笑つて迎へて居る。夫婦は手を取りあつて、夫の首里の珍らしい事、妻は村のその後のことなど話した。人目のすくない、石くびりはそう長くはなかつた、夫は歌つた。

ぬはの石くびり無藏列れてのぼる
にやひん石くびりとさはあらな。(伊野波節)

自分等の門に来ると、妻はいった。

「あなたは表から這入りなさい、妾は勝手口からはいりますから」

夫は這入ると驚いた。妻は居ないで、佛壇には白い位牌が祭られて居た。

妻は病死してゐた、妻と思つたのは、妻の亡霊であつたといひ傳へて居る。

鱒波は大宜味村鹽屋から約一里、山間の部落で、沖繩で一番寒い處だと云はれて居る。

風の強い事も有名で冬期は灯燈がつけられない。チョウチンは懐中に入れて、持たねばならぬと云

ふ一寸變つた處である。

この石くびりで、ぬは節をうたふとムヌマイするといつて、歌はないことにしてゐるとのことである。ムヌマイと云ふのは夢遊病者の様になつて、思はざる場所へ行つたりすることを云つて居る。

一一、海やからあ

海やからあにほれて

夜の明けし知らぬ

いきやし親がなし

御返事しやびが

海やからあ

どん／＼

すうりやいすうり

(海の偉ら者にほれて、夜の明けるのも知らなかつた。何といふて親達に申開きをしませうか。

海やからあはどん／＼の人ですの意)

島尻高嶺間切眞榮里村に珍らしい異人が、漂着した。話す言葉はわからないが、がつしりした体格、やさしい表情しかも、航海術の、たくみなのに、村の美しい娘がほれて仕舞つた。

男女はその洞穴を、愛の住家とした男の郷里がどん／＼(ロンドン)といふので、村の人はどん／＼

洞と、となへて居た。

其の子孫が、今の眞榮里字民で、糸満人は、眞榮里から今れて行つた、と云ひ傳へて居る。今日でも、

糸満町と眞榮里とは婚取嫁取が多く行はれ、糸満人の多くは眞榮里へ、神拜みに、行くとのことであ

る。
眞榮里、糸満の住民は、骨格からいつても、言葉から云つても、又徹底した、個人主義的思想等からおして、どうもこの傳説が事實であつた様な気がする。
同字では、正月でもかきやて風より先に、この海やからあの歌をうたふのが、常例になつて居るとのことだ。

那覇、首里で、海やかなあと云ふて居るのは、間違で海やからあは海のやから者、即ち海のえらい者と云ふ意味である。

高嶺村眞榮里は、糸満町の隣接部落になつて居る縣鐵と軌道馬車で、糸満町まで行けばよい。行きは縣鐵、戻りは軌道も面白からう。
糸満には、白銀堂に參詣して、美殿の昔語りを追想するも愉快である。

一一、伊倉堂前の二本榕樹

文子は旋の、艶聞がねたましかつた。旋は首里に、美しい許嫁が居た。其の上ふとしたことから戀仲に

なつた、鄙には珍らしい情婦を持つて居た。女は歌つた。

思ゆらば里前島尋いていまふれ
島や中城花の伊舎堂

(歌意、愛するなら私の村を尋ねて御出で私の村は中城間切花の伊舎堂です)

と、ちつさう節に出てゐるのがそれである。
文子も人知れず、彼女を戀して居たが、二人共旋に思を寄するのみで。彼れはかへり見られなかつた。文子は口惜しかつた。そして遂に戀敵たる旋を亡きものにして、女を自分の手に入れよふと思つた。その頃旋は頻繁に伊舎堂の情婦の許に通つてゐたので文子は悪漢に頼んで、彼が情婦に會ひに行く道で、殺害させて仕舞つた。

許嫁の女と情婦は二人共男の横死をきくと、自殺して、男の後を追ふた。男が殺されて、暫くたつと毎夜殺された場所へ人魂が現はれた。そして死んだ情婦の家からも一つの人魂が出てきたと思ふと續いて、南の方から、復一つの人魂がやつて来て、三つ巴になつて、狂ひ廻つて居た。云ふまでもなくそれは

掟の亡霊と、設嫁及情婦の、三亡霊であつたのである。
 村人は此の事情を聞くと驚いて、僧侶を頼んで来て盛んなる供養をした。
 そして掟の殺された場所であり、三つの人魂が狂ひまわつて居た跡に、三本の榕樹を三角に植え、彼等の冥福を祈る爲に、盛大なる「あそび」をした。

伊舎堂前の三本榕樹どつと珍らしもの

うれが下をて遊び出来らつしやゝあ

(歌意、伊舎堂前の三本榕樹は大層珍らしい、それが下でしつかり踊りませう)

の歌は、その時出来た歌だと云はれて居る。

掟も文子も役の名であつて名前は傳はらない、掟は文子より上役である。

伊舎堂は與那原より三里北、馬車軌道沿線にある。

一二、よしや思鶴と蟪蛄

頼む比謝江や情ないん人の

我身渡さともてかけて置ちやら

(歌意、國頭地方を旅行した経験のある人は、橋といふのが、どんなに有り難いかと云ふ事が了解されやう。眞玉橋が南山と中山とを連絡する重要地点であるやうに、比謝橋は讀谷山以北、北山方面と中山とを連絡する、重要な橋である。皆此の橋をたよつて居る。

此のたよりにして居る橋は、情を知らぬ人が、私を仲島遊廊に身賣りさせる爲に掛けて置いたであらうか)

これは歌人仲島のよしやが、賣られ行く時比謝橋での歌として、人口に膾炙して居る。

彼等の一行は、北谷街道にさしかゝた。眞夏のこと、暑いこと夥しい。

皆並木の下で憩つて居た。と突然松の木で、物におはれたやうに蟪蛄がなき出したので振りあふぐと、今し一疋蟪蛄が蟬に抱きついた處であつた。

よしやは直ぐに歌つた。

あまりどく鳴な喰ゆんでやあらぬ
かなしさにまかち抱きと見ちやる

(歌意、あんまりひどく泣かんで置け、何もお前を食はうといふのではない、可愛いからして一寸抱いて見たのだ)

とよしやが歌ふと不思議や蟪蛄は蟬をはなした。
蟬はうれしそうに飛び去つたとのことである。

この歌々集にない、喰ゆんといふのが一寸變であるが、打豆節に

うち豆と眞豆我馬小にかい喰ち

わ無藏打ちのすて遊庭かい

(うち豆は大豆のことで、眞豆は小豆で伊江島に多く産する、この二つの豆は馬の好物で滋養豊富な植物だこれを刈つて我馬に食べさせ、元氣をつけ、我戀人をのせて遊び庭へ連れて行か

う。田舎では遊び庭といふのが訪けて、そこで男女が仕事をすんでから遊んで居た。

といふのがある、まんざら間違ひではあるまい。

せんだんは二葉より香ばしで、後日仲島のよしやとして、嬌名を歌はれたのも、遇然ではなかつた。彼れと、仲里按司との戀愛は、平敷屋朝敏の筆で和文化されて、遺つて居る。

及ばらぬとめばおもひ壇す鏡

かげやちやうも移ち拜みぶしやの

(戀がかなはないと思ふと想ひは増す戀人の姿でも心にえがいて見たい鏡とかけてかけをうつして拜まうと詠じてある)

て居た戀もかなつて

浅ましや浮世與所の上や知らぬ

わ身やこの世界にいちごともて(干瀬節)

(浅ましい事世の中他の人々はとうであるかしらないが私は比の世の中に、いつまでも生きて居たい)

と歌つたよしやも、當時の遊廊制度にはかてなかつた。大金を貰つた、抱親は非常手段で、癩病の男によばせて仕舞つた。

よしやはそれから鬱々として樂しまず、病床にたほれて

鳴ゆるもの聞かぬ鳴らぬもの聞かす

この世からあの世近くなたら

(鳴るものゝ音は耳に入らぬで、鳴らないものあの世の物音が聞えて来るが、もう死ぬのも近くなつたのであらう)

黄金のつるの、よしやが死ぬと、抱親は悲しかつた、そして毎日よしやの墓に通つて泣いて居た。

生ちをる間やわ身すそにしちをて

死にばかんしやう門に通てのしゆが(散山節)

(生きて居る中は私をそまつにしてをつて、死んでから墓所に通つて泣いてもつまらぬではないか。かんしやう門は、墓の事で、國頭では今でもかんしやというて居る。名護屋部と安和の間にある墓地には屋部かんしやといふてゐる)

と、よしやの靈がうたつたといはれて居る。

薄命詩人よしやの生れ古郷は、古讀谷山といはれて、今の山田邊だつたらうと想像されるのみでよくわかつて居ない。(花の島参照)

一四、伊平屋の無藏水

新婚の夢未ださめぬ中に、夫はその日／＼のなりはひに海へ出て行つた。

その夜も次の夜も夫は歸らなかつた。若い妻は悲しくて／＼泣き明かして居た。

田名の浮島や風まゝになびく

里まゝになびく田名の宮童(大田名節)

(歌意、田名の浮島は風の吹く通りになびいて行くが、男の云ふ通りに、なるのが、島の乙女である)

そう云ふのが當時の伊平屋島の女等であつた、數人の夫を持ちかへ妻をとりかへるのは別に珍らしくはなかつた、彼女の夫の行衛不明が、島中に知れると、云ひよる若者等がうるさかつた。彼女は海をよく見える海岸に、ハタを持つて行つて、ハタを織りつゝ、夫のかへりを待つた。然し夫はいつ迄も歸つて來なかつた、彼女はいつ迄も夫のかへりをまつた。日毎夜毎に落ちる、思慕の涙は、つひにたまつた。それが、彼の伊平屋島の、無藏水であるとのことだ

大田名のこしに無藏水のあゆん

夫ふゆる女うまにあみす

(歌意、大田名のうしろに無藏水がある。若し夫を振る様な女があつたら、そこに浴せたらよい。貞婦の涙がたまつた無藏水だから、その貞女の様になるだらう)

一五、つれなき夫

二三日仲島に、流連をした夫は申刻近く歸つて來た。若い妻は、嬉しそうに、夫を迎へた。夫にはそれがもの足りなかつた。妬かないのは、愛が足りないのだ、とも思つた。妻に對する物足りなさと、遊びつけた色町の灯の、誘惑に、夫は又外出すると云ひ出した。妻はおとなしく、夫の外出衣を出して、さすがに淋しそうにうつむいて居た。夫の出て行つた後の、障子をたてやうとすると、空は眞暗くなつて、小粒の雨が、降つて居る。妻は天に手を合せて歌つた。

今降ゆる雨や雲に宿めしやうれ

里が花の島いまへる間や

(歌意、今降る雨は雲に宿つて、私の夫が遊廊へつくまでは降らない様にして下さい。妻の行動を、さぐらうと、中門にかくれて居た夫は、電氣に打たれた様に、驚いた。

新婚間もない頃から、妻につれなくして来た自分が悔みられた。
かく迄自分を愛して居た、とも知らず、妻の純真なる愛を、裏切つて居た自分が、恥かしかつた。
妻は美しい、無抵抗の愛は、完全に勝利を得て、夫はその頃、一般男性が、恥ともしなかつた、遊廊
行きをふつつり止め、人も羨むスピードホームが、出来たとのことである。

一六、乗船指名

だんちゆ嘉例よしやいらで差めしやる

御船のつなとりば風やまとも（かきやて風）

小王國琉球は、日支兩大國の間に介在し綾船を薩摩に送つて方物を收め、又進貢船を仕立て、支那に
貢物を捧げ所謂日支兩層の姿になつて居た。

然しながら、支那への進貢といふのは、實際に於ては、貿易をやつて居たので、唐一倍といふ言葉が残
つて居る通り、莫大な利益があつたものである。

尙眞王の時から隔年一回朝貢することになり、王が毎歲朝貢を願つても明主は聽かない。

尙寧王が薩摩に浮囚となつた時からは、明主十年一貢を命じたが尙豊王の代に、三司官毛鳳儀等を明に
遣はし尙寧の計を報じ、且つ十年一貢の制を改め、二年一貢の舊制に復せん事を願つたら、明主は

琉球休養僅かに數年、力未だ舊に復しない、五年一貢の制にしやう。

といふ事になつた。明では疲弊して居る小國から、度々朝貢させるのは氣の毒だからと云ふのであるが
琉球では進貢といふのは名義で、儲かるのだから、可成毎年も朝貢し度いというわけである。

尙貞王の時代からは、貢を支那に入れる時には

進貢船二隻、接貢船一隻

を送るやうになつた。進貢船には、進貢使、大夫、大通事、北京通事、官舎、脇通事、在留脇通事、北
京大筆者總官、與力、儀者等の役人二十人と隨陪及船方百八十人計二百人乗込、接貢船には八十九人

乗込んだから三隻は合計二百八十九人乗込だわけである。

それで役人以外二百人餘りの者が唐船に乗込むわけになる。
進貢船や接貢船に乗せて貰ふのは、誰でも希望する處であつた。昔のことで帆船であつたので、危険で

はあつた。然し唐一倍といふ、儲け口があるので、乗込希望者がとても多かつた。それにはやはり〇〇運動や、就職運動のやうに、進物の多寡が人選決定の、最有力な材料であつた。役人の方でも、己に定内して居るが、選定の日には、希望者一同を、役所に呼び出し、公平らしく、其の中から誰々と、選んで指名したものである。

それが選んで指しめしやいるのである。歌意は、ほんとうに御芽出度い事は、船に乗る人を御指名になるつて、船にのり込み船のつなを取ると、風は順風でよく走るの意である。だんぢゆは誠に佳例よしは芽出度の意。

兩船の那覇出帆は立冬の侯で歸るのは翌年の夏であつた。

一七、ふたがちやの御代

彼女の夫が進貢船の乗組員として、支那に行つてからは、世の中の有様が、がらりと變つて仕舞つた、沖繩は尙寧王の慶長十四年、島津氏に征服されて、人民の意氣消沈して居たのに、支那では明朝清朝の戦亂が起つて、三十年程も、支那貿易に行く事は出来なかつた。

只さへ支那へ行くのは、冒険であるのに、此の戀亂中支那に行くのと、とうてい生きてかへる事は出来ないと、思つた那覇の青年等は、乗船指命を、されはしないかと、戦々競々としてゐた。

それよりか寧ろ罪を得て、平等所(今の裁判と刑務所とを合せたやうな役所)にながれた方がよいと云ふので、道で日中酒を呑んだり、踊つたり、甚だしきは毘帳をつつて、鶏の戀路を楽しむものもある有様で、役人も手のつけやうは無かつた、この時を「フタカチャの御代」と稱えて居る。

女は夫の歸りを、十年も待つたが、杳として、音づれは無かつたので、死んだものと思はなければならなかつた。女の獨身生活は、うるさいもので、絶体權力を持つ、父母兄弟は、厭がる彼女を再婚させた。

初戀の男程、戀しいものはない。今の夫に仕へては居ても、初婚の時の初夜の睦言を忘れる事は出来なかつた。

それから二十年の年月が、なやましく流れた。或日の事であつた。彼女が買物を「ザル」に入れ親類の宅へ行つてゐると、にはかに

「唐船どうス」

支那に行く船を唐船といふ。唐船が這入るよの意が聞えた。彼女は電氣にうたれたやうに、立ち上つた。「ザル」もほつたらかして、外に飛び出さうとしたが、夢中になつてハカマの脱げたのも知らなかつた。家人がそれと注意して、投げてやると、そこに置いてあつたホーキで受けとめ、ホーキを差し上げ

「三十年御船が這入つた。／＼」
と港をさしてかけ出した。

唐船の聲を聞くと、唐船と何等關係のない、老幼男女も港にかけ出す程、待ちこがれて居た。俗謡に

唐船ドワイ シヤン テーマン
一散バーエー ナランシヤー

瀬名波のタンメー

(唐船が這入つたといつても、一生懸命に、かけ出さないものは瀬名波の爺さん許りだの意)とある通り、皆火事見たやうにかけて行く。

群集は、彼の女のハカマ旗を見ては、尙更はやし立てた。彼女の夫は無事に歸つて居た、二人は嬉し泣きに泣く外、言葉はなかつた。

彼女は今は再婚の、夫のあるのも忘れてゐた。二度目の夫は、彼女が歸宅しないので、業をにやしと／＼平等所に訴へ出た。

判官は三名を白洲に召換して調べると

第一の夫の言分も無理ではなかつた。彼れとは離別したわけではなかつたのである。
第二の夫の申立も尤もな事で、彼れは彼女の先夫が死亡したと云ふので彼女をめとつたのであつた。

女の申立も同情すべき點が多々あつた。三十年消息のないのを、死んだと思ふのは當然であるし、時はアマミキヨ以來、嘗つてない、フタカチヤの代であつて見れば、強ゐて彼女の行爲をとがめることも、人間味のない事である。

こんなことを役人が考へて居ると、女は感に堪えぬやうに、つと立つて、第一の夫の手を取つてたつた

あだねがきだいす御衣かけてひちゆい
だいんすもとべらいや手とてひちゆさ

白濁は水を打つたやうに、咳一つするものはなかつた。第二の夫は、とう／＼告訴を取り下げて仕舞つたとの事である。歌意は阿旦垣でさへきものを引つけて引くのに、彼の人と妾とは古い馴染であるんだもの手をとて引くのは無理はないでせうとの意味である。阿旦葉は刀の様な長い葉でトゲがある。ふたがちやの御代とはどう云ふ語か。

彌勤代や目の前ひきよせてをすが

ふたがちやの布やおためわらべ

(彌勤とは菩薩の一で、譯して慈代とも云ふ。釋迦入滅后五十六億七千萬年を経て出現し、衆生を導くといふ佛である。彌勤代とは琉球では、豊年のことに云ふて居る。豊年はもう目の前に來て居るが、ふたがちやの布は織つたか童べよの意)

とあるやうにふたがちやとは諸作物がよく出來て食料品も豊かで、人民が泰平を謳歌する御代即ち黄金時代理想的時代の意である。

ふたがちやを尤もよく説明して居るのは木遣歌(國頭さばかり)である。

(前略)

御萬人まきりや

(國中の人々が)

みな肝そろとて

(皆心を合はせて)

世果報のつづきや

(豊年のつづくは)

ふたがちや御代さめ

(ふたがちやの御代である。)

(世果報は世のしあはせで、豊年に云ふ。國中の人民が一致協力して争はない。天は時をたがはず雨を降らせる。地には作物がその御かげで豊作する。天地人三才即宇宙萬物が皆その道を行つて行く御代で、それこそ人類のユートピアであるそれで、ふたがちやはユートピアと同じ意義になる。)

孤島苦の琉球は、住時交通不便であつた頃殊に慶長以前甘諸渡來以前暴風雨の被害甚だしい時には、大飢饉になつて惨状目もあてられなかつた。首里城下の大中坂にも錢箱を枕にして、死んで居るのがあつたとの、傳説もうそではなさそうだ。それで飢饉の事に餓死と云つて居る程で、琉球人は可なり苦い生活難をなめて來たので、豊年に對するあくがれば、他國より強い。



支那の梁朝の僧號は長汀子體肥えふとり、腹便々として居る、彌勒菩薩の化身といふ布袋像をでは彌勒といつて、彼れの像そのもの、表現するやうな、豊かな年を彌勒代といひ、憐どふたがちやの代に、近い意味に使つて居る。

首里赤田にあつた首里殿内には、最近まで舊曆八月には、彌勒の祭りがあつて、彌勒の面をかぶつたのを先頭に氏子の行列があつた。布袋は大きな袋をかついでゐるが、三ロクは片手に錫杖片手に軍配團扇を持つて居るも面白。

十才前後の子供等が振り袖をつけて、彌勒の後から

赤田首里殿内黄金燈籠さげて

あれがあかがれば彌勒御迎

十日越しの夜雨草葉うるはしゆし

恵ある御代のしるしさらめ

等の可愛歌、歌つて居た。



私はふたかちやの御代を説明したが、どうしてあの傳説にあるやうな、困つた時代を、ふたかちやの御代といふて居るのか、解しにくい事である。皮肉に名づけたのが、デカダン氣分でいつたのか歌に

道々のちまた歌うたてあそぶ

彌勒代のよがほ近くなたさ

(道の巷々に歌をうたつて遊んで居るが彌勒代の豊年が近くなつたの意)

彌勒代の昔くりもどち今に

お萬人のまざり遊ぶうれしや

(彌勒代の昔を今にくり戻し、人民が皆あそんで居るのは嬉しいことだの意)

二首の歌に見る如くあの時代、自暴自棄から出ては居たけれども、那覇市中で、眞晝間酒をのんで歌三

味線踊、戀がおほつびらに行はれたといふから、表面如何にもふたかちや御代らしいといふのでつけた名であるかもしれない。

(首里殿内といふのは首里三殿内の一で神殿である。王朝時代には行政上首里を三平等に区分してあつた。

一、眞和志平等(五ヶ村)

眞和志、町端、山川、金城、寒水川

二、南風平等(六ヶ村)

大中、桃原、當藏、鳥小堀、赤田、崎山

三、西平等(五ヶ村)

汀志良次、赤平、久場川、儀保、泊(現在那覇編入)

此の三平等には、各神殿があつて、眞和志平等には山川に眞壁殿内、西平等は汀志良次に儀保殿内があつて、各大阿母志良禮といふ女の神職が居た。之は尙圓の子尙眞が、中央集權して三山の各間切の按司共を首里に参勤させたので三山の火の神をも三殿内に移した。祭政一致の頃だから、大あむしられ

は國家の安寧を祈り且つ諸間切の祝を監督し職は世襲で寡婦から任ぜられてゐた。

一八、前妻の手

夕立がはら／＼と降つて來た。

首里城下のさる殿内の門に二人の男女が別々になげ込んで來た。

男に顔を見せない慣習を忘れぬ女は傘をかほをかして立つて居た。

雨は仲々止みそろにはなく、夕暗は次第にせまつて來た。男は女を見ると結婚間もなく離婚した、前妻

であつた。いたづらな心がむく／＼と頭を持ち上げ

「こつち御出で」

と手を取つて引いた。女は吃驚して聲を立てた。

彼女にはそれが、前夫であるとは、少しも知らなかつたのである。この時筑佐事(今の巡查)が出て來

たので、女は男の不法を訴へた。

男は面食つたが、とう／＼筑佐事に連れられて平等所に引き出された。

この事が首里中の、評判になつたので、當時聖人といはれて居た、攝政具志川王子尙享は平等役人へ

あだねがきだいなす御衣かけてひちゆい

だいなすもとべらひや手とてひちゆさ

の一首を送つたら、判官も感激し法を生かして、人間味のなる裁きをして、男は直ぐに、無罪放免になつたと云はれて居る。

石な子のいしの大瀬なるまでも

おかけぶしやめしやうれわ御主がなし(かきやて風)

(石な子とは子供等が色々の方法で、遊ぶに使ふ小石のことである。その小石が大きな巖になるまでも、御丈夫であらつしやいわが王様よの意)

月もてり清さ糸とまいれわらべ

露の玉ひろでぬちいや遊ば(中城はんた前節)

(月も美しく照つて、露の玉がきら／＼光つてゐる。子供等糸を拾つて來なさい、露の玉を

ぬいてあそびませうの意童心をうたつた處琉歌中まれである)

これは何れも具志川王子の歌である。此の歌で見る通り、王子は實に聖人とうたはれた人である。自分の寢所に、追ひ込まれた盜賊に金を與へて逃がしとう／＼改心させた逸話もある。當時の死刑因も、聖人の命令と聞くと安心して刑についたと云はれて居る。尙質王時代攝政として、王を補佐し、國治大に擧つた。その頃は薩摩の沖繩入り后間もなく、非常に難局に立つて居た。琉球の大政治家羽地按司尙賢を推擧したのは、具志川王子その、人であつた。道徳家であつて、政治家であり詩人であつた、具志川王子はしたはしい人である。

一九、無情な菊

夫婦は人倫の根本である。楽しい時も、苦しい時も、互に助けあつて行く、人生の道づれとして、尤も親しく戀しいものであらう。

福の如何なる人が黒髪の
白くなる迄妹が聲をきく

と萬葉の詩人は、歌つて居る通り、夫婦が互に、白髪になる迄、一緒に暮すことが出来れば、ほんとに幸福であらう。然し、いづれは、夫婦の誰かが、早く死なねばならぬ運命である。取り遺された者の悲しさはどんなにあらう。山上億良は

家に行きていかに吾がせむ枕づく
つま屋さぶしく思ほゆべしも

琉球の歌人は同じ思ひを

行かれるとしに無藏よ先立てよ
朝がほの浮世獨りくらち(東江節)

(年老つてから、愛する妻に死なれて、朝がほの様な果敢ない人世を獨り暮すのはさびしいものだ)

と歌つて居る。
これは首里の、若い未亡人が死んだ夫のことが、忘られない。九月になつて夫の丹青した菊は、いつもの通りに、黄白色とりくに、咲き亂れて居る。夫戀しの思ひは、この菊と共によみがへつて來るのをどうする事も、出来なかつた。未亡人は歌つた。

素立てたる人やこの世にや居らぬ
たる頼で咲きやが無情の菊や

(歌意、養ひそだてた人は、もう死んで仕舞つて、此世の中には居ないのに、誰に見せやうと思つて、咲いて居るかほんとは、無情な菊だよとの意だが夫に別れ、たよりにする人も居ない自分の悲しい心持を、菊に托して語つて、居る處に此歌の優れた處がある。)

一一〇、よだつ外して

三方緑の連山に、しつくりと抱かれ、静かに、ねむつて居る 様なあの頃の渡久地は、たしかに平和な楽天地で、あつたに相違ない。半ば朽ちた、渡久橋のほとり、月影に照らされた、若い男女が、頬被りをしては戀の歌をうたつて居た。今日のやうに、食べるといふ心配もしなかつた。大きな野心といふのも、持ち合さなかつた。人は現在に満足して土に親しみ、海に親しんで働いた。そこには、つちの様な、真紅の戀の花も咲いたであらうし、白百合の様な、純真な香り高い、藝術の花も咲いたであらう。

若い男は歌つた (本部長ぶし)

トグチ 渡久地からのぼて花の本邊名地

モトブ 遊び建堅に戀し崎本部

なり木引きよせてもらなわなないおきゆめ
わ無藏引よきせて抱かなわな置め

女は歌ふ

わがよたつはんち里にうちはけて
佛のたゝばわ胸ともれ
はじめてどやしがかんかなしやあすや
むまれらぬ先の御縁やたら

ちよつとやく 一寸譯して見ると

トグチ 渡久地よりのぼれば

モトブ 遊ぶは建堪

實の生る木をば
ちぎらで我れは
吾妹子をば引きよせて

はなもとへナチ 花の本邊名地

モトブ 戀しき崎本部

引きよせて
置くべきか
抱かでわれは置くべきか

よだつ外して

せこにかけなむ

わが俤を

しのぶとき

わが胸なりと

おもへかし

始めてのあひなれど

かく愛憐しきは

生れぬさきの

縁なるらむ

生り木をちぎつて食べる様に、美しい宮童を、引き寄せて戀を語るあたり、ほんとに自由な戀愛ではないか又初めての男に身も心もゆるして、よだつをはづして男にかけてやつてしかもこんなに可愛いといふのは生れぬ先の縁であつたらうと云ふ。ほんとに戀愛生活の徹底したものはある。なり木は果樹の事で、よだつとは田舎、山原の女が、肌につけて居た、クブシイの事で、現在では老女以外につけたものはめつたに見當らない。

二二、大 新 城

大新城毛龍吟は愈々最後の決意を、實行せねばならなくなつた。それは故王の遺志を、尊重することであり、彼れの愛して居る世子尙元の、浮沈に關する、一大事であつた。

尙清王は兼ねて、世子尙元が、嘔であるので、自分の没後相續問題の、紛擾を豫想して、心を痛めて居た。

それで臨終のとき、三司官毛龍吟、和爲美、可葛昌の三人を枕頭に呼んで、呉れ／＼も、尙元を國王にするやうに、頼んで薨去したのに、和葛兩人は故王の言を反古にして、第四王子尙鑑擁立を主張して居る。

尙元が、嘔であるといふ事は、王位繼承者としては、非常な弱点で、文武百官の大方は、和、葛、二相の主張に同意して居た。

今日中城御殿（今の一中のところであつた）の最後の會議に於ても大新城の、世子尙元擁立の主張は、故王の遺言であつても、嘔がどうして、國を統治して行けるかと、一蹴されて仕舞つた。不具者の悲哀一言でもものいつて下さるとよいがと思つて、見ても、それは仕方のないことであつた。尙鑑はすぐ百官に護られて、首里城に乗り込むことになつて居る。

故王の遺志だ、何處迄も、世子を位につけねばならない。そう決心して居た、大新城は未だ少年の尙元をしつかりと背負ひ

らくぶつの御帯よわら押し廻す
首里加那志みやだりでわねさだら

らくぶちの御帯といふのは三司官の帯をいふ帯を横腹に押し廻すと云ふのは、しつかり結んだ有様をいつたのであらう。そして私が真先に首里王様の御用をつとめませうの意

と石垣を乗り越えて、尙鑑の行列が、王城に到着せぬ中に、王城に馳せつけ、正殿玉座に尙元を着座せしめ、自分は長刀を持つて守護して居た。

尙鑑、擁立の百官連機先を制せられて、驚いた。それと共に殺氣が早くもうんぜろされて居た。

大新城は大音上げ

「予は故王の遺言より、世子尙元を王位におす。尙元様に指一本でもさしたら、みなごろしにしてやる」

と叫んだ途端

「大新城、そんなに荒立てんで」

それはまぎれもなく尙元の聲である、大新城はこの奇蹟に、夢かと喜んだ。百官も茫然とした。尙元を排するのは嘔であるといふのが唯一の理由であつたのだから、嘔でない今日尙元を排して尙鑑を擁立する理由が消滅したわけだ。尙元はそのまゝ琉球王の位をついだ。

大新城は歌ふた。

けふのふこらしややなをにぎやなたてる

つぼでをる花の露きやたこと（かきやて風）

（今日の嬉しさは何にまあたとへやう、つぼんで居る花が露にあつたやうなものだ）

因に三司官とは三人の國務大臣の事、三司官は王自ら其の人を選定することは出来ない。諸官の投票で選定された。中城御殿とは、東宮の御殿の事であるが尙元没後七十余年後尙豊王の時始めて今の第一中學校敷地内に建て後安政四年現在の尙侯爵邸に移つた。傳説の中城御殿は城内であつたと解し

てよからう。

尙ほ尙元王は後奈良天皇の弘治二年即位、在十七年四十五歳で薨ぜられ、即位の時は二十九歳の青年であつたと正史には見へて居る。

一二一、げらいを座敷

今日から金丸は越來王子に仕へる事に定まるとほつとした。未だ二十歳のころ兩親に死なれて、淋しい苦しい中に、家業を勵んで居たのに、島民の誤解から二十四歳のとき家も島も棄てて妻と幼ない弟をつれて、郷里伊平屋を逃げねばならなかつた、漸く國頭間切に安住の地を求めたと思つて居ると、再びこゝをも去らねばならなかつた。それは何れも、村人よりも、自分の田がいつも水が多くて、作物がよく出来るので水を盗むのだとの誤解に原因して居るのであつた。農村は、彼れには住まれる處ではなかつた。彼れはとう／＼思ひ切つて、王城の地首里へ出て来てつてを求めて、越來王事に奉公が出来るやうになつた。過ぎ來し二十六年は全く貧苦と迫害にさらされた流轉の生活であつた、金丸はただ今日からは、定まつ

た扶持で妻と幼ない弟を養つて行く事の出来る心安さで胸が一杯になつて居た。後の尙泰久王その頃の越來王子は金丸の人物が氣に入つた、きつと後々立派な人物になるであらうと考へてそしてたづねた。

「金丸どうだ」お前は將來に向つてどんな希望を抱いて居るか
金丸はハツと頭を下げて歌つた

命がふ願へば石の身のごとに
首里がおいゑかい願へばげらいを座敷

(命果報を願へば石の様に岩重にありたく首里の御位階を願へばげらいを座敷の位でありますの意)

琉球王朝の官職の位階は三司官が正一品から従一品迄、三司官座敷は正二品になつて居る。座敷には従三品の申口座敷、従四位の吟味役座敷、従五品の下庫理座敷等種々あるからげらいを座敷は三司官座敷の事をいふのであらう。)

尙徳王の没後王位に上つた尙圓も金丸の頃は正二品を理想として居たのであつた。彼れの理想は著々として進み、越來王子が王位に上る頃には内間地頭になり累進して四十四歳の時には鎖之側に任ぜられた、鎖之側は正三品である。その後尙徳王に練習して用ひられんので官を止めて内間に隠退した。文明四年人民におされて王位についたのが彼れ金丸尙圓王で俗に伊平屋王と云ふ、現尙侯爵家の祖先である。孤島、伊平屋島の一孤兒は故郷を出でて三十年にして、三十六島に君臨する事になつた事とは感慨深き事であつたらう。

西の松金がいちちや御衣めしやうち

おちやんなし振りや拜みぶしやの (長伊平屋節)

(西の松金とは尙圓王の事。その松金が美しい衣裳を着て、威あつて猛からざる温容を拜んで見たいものだの意)

百筋のはんたおされねーち見れば

西の松金が手ぶり清さ (長伊平屋節)

(はんたとは端といふことだが歌はれて居るものは、多く下は断崖になつて居て見はらしのよい處を云ふ。嘉敷森には又嘉敷ばんたとも云つて居る。百筋のはんたに行つてうつむいて見ると西の松金の手振りが美しい。手振り清さは琉歌集に澤山つかはれて居るが、舞ひの手といふよりか、其の人の姿と解したがよからうと思ふ。

腕があるとか、手腕家とかといふ様に 古來手は全人格を代表することに用ゐられて居る) 何れも尙圓を慕つて歌つたものである。

琉歌中作田節には國王を歌つたものが出て居る。

ゑぞのいくさもり夏過て冬や

御酒もてよらて遊びめしやうれ

(ゑぞのいくさもりは今から七六〇年前舜天王統義本の後をうけて王位をついだ英祖王の事である。いくさもりよ冬過ぎて夏になつたなら酒盛りをして一緒に遊びなさい)

豊むしやなもりが謝名上原のぶて
けやげたる露の玉の清さ

(じやなもりは今から五八二年前英祖王統西威を亡ぼして王位についた察度王の事である。
世にうたはるるじやなもりが謝名上原にのぼつて踏んだ露の玉は美しいの意)

月しろの守り勢高さの眞物
みかけてり渡り國やまろむ

(勢高さの眞物は月しろから起つて今から五二五年前察度王の子武寧を亡ぼして父尙思紹を王位につけた尙巴志王の事である。彼れは九十余年間鼎立してゐた三山を統一した英雄である、
歌意は巴志の威勢で國がまるく一つになつたと謳歌して居る)

西曆一八七七年権臣利勇を亡ぼして王位に押された

◇舜天王統は
舜天(七四五) 舜馬順熙(六九四) 義本(六八三)

三代臨(七十三)年で滅亡して仕舜つたその後君した。

◇ゑぞのいくさもり英祖王統は

英祖(六七〇) 大成(六二六) 英慈、玉城(六一八) 西威(六九五)の五代西曆一二六〇年—一三五〇年、九〇年で滅亡

◇じやなもり察度王統は

察度(五八二) 武寧(五三四) 二代

西曆一三五〇年—一四〇五、五十五年で滅亡

◇勢高さの眞物尙巴志王統

尙思紹(五二五) 尙巴志(五一〇) 尙忠(四九二) 尙思達(四八五) 尙金福(四八二) 尙泰久(四七八) 尙徳(四七一)

西曆一四〇五年—一四六九年 七代六十四年

◇西の松金尙圓王統

尙圓(四六二) 尙宣威(四五四) 尙眞(四五五) 尙清(三二五) 尙元(三七六) 尙永(三五九)

尙寧(三四三) 尙豐(三〇三) 尙賢(二九一) 尙質(二八四) 尙貞(二六三) 尙純()
 尙益(二二六) 尙敬(二一九) 尙穆(一八〇) 尙溫(一三七) 尙成(二二九) 尙灑(二二八)
 尙育(一〇七) 尙泰(八四)

西曆一四七〇年—一八七九年二十代四〇九年間

然かも廢藩置縣で、王國の名は亡びたが、尙泰王は侯爵に列せられ、未だ榮えて居る事は書く迄もない。各王統、初代の國王を人民は如何に謳つたか見比べて見るのは、興深き事であるので年代表を掲げて見た。

王名下の數字は即位より昭和六年までの年數を表はす

(情話中年代の出る事實は本項を参照され度い)

一二三、尙泰王の心持

尙泰侯は東京飯田町の侯爵邸に、長途の旅に疲れた身を横たへた。それは明治十二年春四月の末つ方のことであつた。明治五年 王政維新の慶賀使伊江王子宜灣朝保の正副使が、東京から歸つて來た時から、

己にかくなる事をは覺悟して居た。

尙敬王以來祭温の忠言としてのこされて來た、

他日一片の書狀で、國王の位を失はねばならぬ事があるとしたら、それは日本から來るのであらう。

日支兩屬といふのが不自然な存在で永遠に續けらるゝ事でもなく慶長以來擗取されて居る、島津の支配を脱し、一親同仁の聖恩に浴する蒼生は却つて幸福ではあらう。

民族的に云つても、言語上、風俗、習慣上から云つて、琉球人が日本民族と同一民族である事はよく承知して居る。今度の廢藩置縣といふのは、いへば琉球が落ちつく處へ落ちついた迄の事であつて自分に對する聖恩の優握なるに心からの感謝を捧げて居るのである。

然かしながら、之は理智の世界である。名義のみといつても舜天以來三十七代六百九十余年、尙圓王以來二十代四百年間、父祖の刻苦經營した、琉球三十六島の王位を失ふ事は、死にまさる苦痛でもあつた。住みなれし首里城の明け渡しから、人心の動搖續いて四月七日明治丸から沖繩を去る時の、故里と人民への離苦たてつゞけになめねばならなかつた苦盃は、流石賢明なる侯にも、堪えがたかつた。

ただしばしだいんすまどろめもすれば
なれし故里も見ゆらやすが

(ただ一寸の間でもまどろむことが出来たなら夢にでも住み馴れた故郷を見る事が出来るであらうの意當時の侯の心持ちに涙ぐまれる。)

侯は慶長十四年薩摩に征服され捕虜となつて上國した祖先尙寧王及王妃の詠歌を覚え出した。

よかてさめ兄弟や親がなしおそば

わ身や興所島のあらの一粒 (尙寧王)

(兄弟達はしあはせだ、親の御側で暮してゐるが、私は他國に来て一人ぼつちの淋しい境遇に置かれて居る。

あらはもみの事で、白米中に一、二粒つきのこされたのが這入つてゐるのを云ふ。それにたとへて云つたのである)

北風の眞北ふきつめて居れば

按司添前てだの御船どまちゆる

(琉球では東をあがり、西をいり、南をはへ、北をにしといふ。北風が丁度眞北をふきつめて居るから、沖繩に歸るのは順風である。尙寧王様の御船が這入るであらうからそのお船を持つのである。按司添前てだは王の意)

侯はホロリとした、その頃の尙寧王及王妃の悲しい思ひが自分の身に引きくらべて、ひし／＼と胸にせまるのをどうすることも出来なかつた。

あの時は琉球の社稷が如何になり行くか、一寸先は暗で全くわからなかつた。然し今日は只國王といふかざりが取り去られた許りで、琉球の社會も人民も、また我第舊王族も、幸福になつて行く事は明かである。何事も時代の流れである。

大河の河するの一人のよく防ぎ得るものではない。

開鐘がねやなてもうすむ人や居らぬ

一期この世界や暗がやゆら

(暁の鐘は夜の明けたのを告げてなつて居るが起き上る人は居ない。いつまでも此世の中は暗であらうかとの意。つまり其の當時時代を解する人が居ず。皆時勢を知らず、頑迷であるのを嘆じた歌である)

と詠じた。王の眞の知己であつた、三司官宜灣朝保も、四年前憂ひと迫害の中に死んで行つた。

あゝ宜灣が今まで生きて居たら、故郷のこともこんなにか心に痛せんでもよいが頑固連が人民をあやまることが心配だ。理性に立ちかへつては安んじ、情の世界に追はれては苦しんで居た、琉球最後の國王尙泰侯の心持「なれし故里も見やらやすが」の一首にうかがはれるではないか。左は侯の詠歌である。

盛ていくなかにつゝしまなおきゆみ

よかるほど稻のあぶしまくら

(榮へて行つたら行く程慎まないでおこうか慎むのである。よく出来る程稻は頭をたれてあぜを枕にするの意)

壽や千代におし延ておちど

百のうれしごと日日に聞る

(命はいつ迄も長く延して置いてこそ澤山の嬉しい事を毎日毎日聞く事が出来るのだの意)

二四、忘れ草

「フオーゲツト、ミー ナット」僕を忘れるなど、愛する女へ董をなげ與へ、自分は足をすべらして、水底深く沈んだと云ふ悲しい、ローマンスをもつ忘れな草それは春毎にしほらしい紫の花咲く董の異名である。

それに反對の、忘れ草といふのが國頭地方にある。

それは芙蓉（ヒラハ草）の異名である（芙蓉は車前、常道、馬島、蝦蟆衣等とも書かれる薬草である。）

忘れ草とまいて忘れてやりすちも

思ひどまさやべる里がすがた

（忘れ草を採って来て、忘れやうとするけれども、戀しい想は、ます許りで、戀人の姿を忘れる事は出来ない。）

死んだ夫を思ふ、妻の歌であることは、説明を要しない。國頭村桃原では、葬式の時、必ず途中でガンを下ろしてこの歌を三度歌ひつゝ、芙蓉の葉で三度、棺をなでるし。同村比地では、墓に入れる時棺をあけて胸に忘れ草を置くと又羽地村源河あたりでは、死体の胸に、芙蓉の葉をおいて葬るとのことであるし眞喜屋ではキンランフチヨーに入れて棺に収める。

いつの世に、どうして始まつたか、それは知るよしもないが、土俗としては、歌にまつはる丈、面白いことだと思ふ。（普通忘れ草とは萱草の異名になつて居る）

一二五、わ 玉 黄 金

とりの伊平屋嶽やうきやがてど見ゆる

遊でうきやがゆるわ玉黄金（長伊平屋節）

この歌は尙圓王が伊平屋島で、一農夫として幸福にくらして居る時その頃元氣であつた、彼れの母が我が愛兒の、男らしい姿、その美しい舞ひの手振りを見てよんだ歌だと云はれて居る。

とりは風が静かで、波おだやかなる事、うきやがては浮き上つての意で、目立つて見えることである。

わ玉黄金は我子のこと。なぎの時の伊平屋嶽は大層きはだつてよく見へるそのやうに遊びをしてゐる我子の舞の手は、他人よりはきは立つて美しいの意である。

此の歌の變形と思はるゝ、歌に、一つの面白い傳説がある。手水の縁を書いて若い男女の青春の血を湧かした平敷屋朝敏は、苦の下若草物語、萬歳、貧家記、雨夜物語等の和文でも、一家をなして居た。

此の文豪も惜しいかな、蔡温一派を除かうとして活動して、罪を得、あたら三十六歳を一期として、死罪に處せられる事になつた。その頃の死刑は、罪人を船に乗せて、伊平屋渡に連れて行き、左右の足に

大きな黒石を結びつけて、海に投じて居た女の手一つで貧苦の中に育て、愛子の最後をきくと、健氣な母親は、斷腸の思ひであつた。然し何とかして死体だけでも葬つてやり度い。母の念願はこれであつた。

とりの伊平屋嶽やうきやがてどゆゆる

しすでうきやがゆるわ玉黄金

(とりはなぎのこと。波の静かな時の伊平屋嶽はくつきり浮き立つて見へる。沈んで浮き上るのは私の息子であるの意である)

親を思ふ心にまさる親心で、母が歌ふと石をしばつてあつた足の繩を、鎌が食ひきつて、朝敏の死体は海に浮いて来たといひ傳へて居る(朝敏は安謝で斬罪に處せられたと記録には書かれて居る) 彼れの遺族は皆それ〴〵流刑に處せられたが、高離島に流された、若い平敷屋の妻は、配所の月を眺めて歌つた。

高離島やもの知らせどころ

にやものしやべたん渡ち給ぶれ(高離節)

(高離島は人をいましめるによい處だもうわかりましたから許して本島へ渡して下さい。) 那覇から十里にも足らぬ島で、濱、平安座、高離、伊計と仲よく列んだ島々は、屋慶名から、近い様だけれども昭和の今日でも、潮の満干や、渡し舟の都合で、渡るのも仲々容易ではない。與那城の郵便配達は、渡舟がなくなつて、時々島に泊つて行くと語つて居た。元祿年間の昔の事だ、ほんとに平屋敷の妻は、苦しかつたらう。今も高メーチ毛の下には、其の配所の屋敷がのこつて居る。

二六、妬の家の茄子

一人息子に嫁をめとつてやつてから、彼女は何ともいへぬ、淋しさがひし／＼と感ぜられた。母のみを愛してゐた、わが子が妻をめとつてからは、母に對する愛が、減じて来たやうに、思はれるのであつた。

そう思ふと、彼女には愛児の愛を奪つた嫁がにくらしかつた、息子の留守の今日も嫁いびりが始まつた。些細な落度をつかまつて、嫁をしかりつけ、實家へかへれといつて聞かない。

嫁は、ひたあやまりにあやまつて免して呉れる様に、願つても意地悪になつた姑は、どうしても嫁の歡願を容れて呉れなかつた。嫁はかなしかつた、夫にあふことも出来ずに歸るのは苦しいことであつた。首うなだれて家を出て行かうとすると、日頃水をやつたり肥料をやつたりして育て、來た、茄子島が目に入つた。茄子は吉兆の時には、よく生ると傳へられて居る。嫁は歌つた。

なれやうなれなすびすとの屋のなすび

ならなしゆてなすび嫁名たちゆめ

(歌意生れよ生れ茄子よ澤山生れよ姑の家の茄子よ。生らないとどうして嫁の本分が立つか) 姑はこの歌を聞くと驚いた。去られ行く身でありながら、この島の茄子が、澤山生る事を願つて居る心持に感激して、夢のさめたやうに、自分の心持が、悔わられた。嫁をよび入れたのは云ふ迄もない。そしてそれから後姑嫁 仲よく平和な生活に入つたとのことである。

二七、里や見らぬ

ナカゲスクマギレアガニムラ 中城間切安谷屋村の三良は、その頃村の模範青年として、評判がよかつた。男振りもよいし、心立てもよいので、云ひよる女も多かつた。其の中で、家柄もよく、小町娘として評判の高い、ウタといふ娘を妻にして、仲良く暮して居た。二人の仲には可愛い思の子が生れて居た。

三良は或日、掟の處へ呼び出された。掟は三良を一間に召して氣の毒そうに云つた。

「公儀からの命令で、こんな事は、私の口からは非常に云ひにくい事ではあるがと前置をして、話し出したのはこうであつた。

今度首里政府では、美里間切知花村で、陶器を作る計畫になつて居るが、これには技術が要る。それで朝鮮人が、那覇に來て居るので、それから習ふことになつてゐる。然し之には條件がある。彼れの氣に入る美しい女を、彼れに與へると云ふことである。

朝鮮人は、毎日那覇の市中を、廻つて歩いて居たら、田舎から、買物に來た、一人の美しい女を見つけ、てその女を妻にし度いと申し出た。

それが此の間、那覇に買ひものに行つた。お前の妻であつたやうだ。

役人から私にウタの事をお尋ねがあつたので、彼女は三良といふ歴史した夫があり、子まで出来て居る段言上したので役人も驚いて、朝鮮人に、その旨を話して他の女を物色するやうに頼まれたやうだ。朝鮮人は條件をたてにとつて、どうしても、ウタでなければいけない。

若しそれが出来なければ、陶器製法を教へる事は、御免を蒙ると云つて頑としてきかない。

役人も困つた。折角工場も作つてあるし、朝鮮人をおこらせると、陶器が出来ない。沖縄で、陶器が出来ると大そう人民の爲になることだから、無理な命令ではあるが、妻のウタを、犠牲にする外はないといふ意味であつた。

公儀の命令とあれば、仕方はなかつた。ウタは夫と生木を引きさく様に、戀しい夫と、息子を殘して朝鮮人の側に行かねばならなかつた。

夫婦は血を吐く思ひで泣いた。

ウタは、言葉もわからぬ、朝鮮人の側に、地獄の火で焼かるゝ様なその日／＼を送つて居た。

彼女は瓦屋の上に登つて歌つた。

から屋つちのぶて眞南風向て見れば

島の浦と見ゆる里やめらぬ

(歌意瓦屋の上の上つて南の方に向つて見ると戀しい人は見えないで、自分の村の浦が見えて居るばかりだ。瓦屋とは陶器を焼くところ)

三良は、子供と二人、味氣ない日を送つて居た。五六年は夢の間に立つて子供はもう九歳になつた。父から母の話をきいて泣いた。

子供心に母戀しさから復仇を考へ、美里間切知花へ行つて母をうばつた朝鮮人を録で、切り殺したと云ひ傳へて居る。一説には此歌の瓦屋は、首里瓦屋で、乳母に行つた妻が殘してゐる夫を戀ひつゝ歌つたともいはれて居る。

中城間切安谷屋は普天間の東北十四五町の處にある。美里間切知花は安谷屋から北約二里半位で知花から安谷屋は丁度眞南に當つて居る。

二八、一のかいち二かいち

附イツチクタツチク

一のかいち二かいちよと遊ゆたる

いつの間に里やおとなゝたる(打豆節)

琉球の子供等は黄花咲くユナーの下や氣根たゝる榕樹の木蔭で、無邪氣な童謡をうたつて、遊んで居た。

一のかいち二かいちは、その童謡の一つである。

一緒に童謡をうたつて遊んで居た相手の男から戀を打ちあけられて、詠じた歌であらう。

此童謡は又チャンケンの代りによく使はれる。おならを落とした者がわからない時には、男女の子供等は圓陣を作つて向き合ひ指をかるくまげて、可愛い輪を作る。すると審番になる兒は、人差指を名々の指の輪に軽く入れつゝ此の歌をうたつて行くそして一番終りに當つた兒がおならを落した下手人にされるのである。

歌は

- 一 ヌシケーチ
- 二 スシケーチ
- 三 ヌシラドー、シラクムトイ
- 四 ヌシトナミトナミヌナカヌハシ
- 五 ヌシケーチ
- 六 ムムトノ、ヤマーガ ヤマシシ トランデ イツポー カツポーカーミス、ザーシヌ プーヒ ツチヤン

此の歌は六だけは名護で、一から五までは那覇で採取したものが、意味はよく、判然しない。

然し今日の司令部前には澤山お寺があつたが、或寺で養子問題が、出て競争がはげしく、持て餘して居たのを上の座主が候補者を並べて置いて、中央のものを指名して決定した事情をうたつたものであるとの事である此の童謡と同じやうに、つかはれるのにイツチクタツチクがある

那 覇 首 里

- 1 イツチク タツチク 全 上
- 2 チョーニガ チーガー 全 上
- 3 チクムク、チーボーラーガ チクムク、チンブル
- 4 ウドンヤ クシナチ チーチン ターガー
- 5 フールガ ヤイ 全 上

1、イツチク、タツチク、は座つちよか立つちよか座つて居るか立つてゐるかの意

2、チョーニガ、チーガーは十二がちいがといふのは一舛舛の對角線にきつたものゝ事である。一舛舛にはチョーバンと云ひ五合舛にはチイガと云つて居る通り半分といふ意味である。十二の半分だからチョーニガチーガーは六といふ事。

3、チクムク、チンボーラーがはちくむく、ちぶらあで、琉球語では面の事をハ、チブラーと云つてゐる。ちくむくは髪をおどろに振り亂して居ることだから、チクムクチンボーラーは髪を亂してゐるお面といふこと。

4、ウドンヤ、クシナチは御殿を後にしてと云ふ意

5、フールガ、ワイはをるがわいでわいは那覇語のあとにつけていふ言葉居りますよの意

1 2 3 5は何れも同意義である。

4はチーチンターがのチーチンは鉦隠で、釘かくしたちがの意で、那覇のも首里のも結局同じ意味になるのも面白い。

此歌は、波の上護國寺の六つの面（クギカクシ）のことをうたつたものと云はれ居る。

一のかいち二かいち三は、板をどりの歌から出て居ることであるが、それが廢れてから、別種のローマンスを伴つて來てゐるし、イツチク、タツチクは本土童謡の譯とも云ふが、琉球的に歌はれて居るのも興深く思はれる。

二九、久良波のろ殿内

男はどうしても寝つかれなかつた、名護を立つて來て九里餘りの道中で、可なりつかれて居た。然し、宿の主人の、餘りに親切な態度、美しい女が、初めての旅の男に對して、身も心も許して居るこ

となど、合点が行かなかつた。

久良波前のハダラ眠りすなハダラ

やがて網うちやがきゆんどハダラ

(久良波前のハダラ(小魚だが鱗がかたい)よ眠るなよもうちき網うつ人が来るよハダラよの意)

入る人や居すが出る人や居らぬ

久良波のろ殿内不審どころ

(久良波祝殿内に這入る人は居るが、出て行く人を見たことがない。不思議なところである。) 村にはいる時小耳にはさんだ、この俗謡など、頭に浮んで来た。自分の側には、彼の美しい女が寝て居る。ふと見ると女の左の手首には一條の縄が結びつけてあつた。男はハットしてこつそり起き上つて隣室をのぞくと宿の主人は出刃庖丁をといで居る。男は吃驚した。そつと歸つて、女の手首に結んである合圖の縄をといで柱に結びつけ、音せぬ様に戸をあけて外に飛び出し、根かぎりかけて逃げ出した。

宿の主人は、元三山てい立の頃久良波の關守をして居たが、三山統一後、この關所が廢されると、祿をはなれて仕舞つた、彼れは美しい久良波のろと情を通じ、女的美ぼろを利用して、宿を頼みに来る男を色仕かけで籠らしくしては、殺害して、死体はこつそり古井戸に投げ込み路銀をかすめとつて居たのであつた。

悪運つきて彼の旅の男を一人とり遁して、とう／＼悪事露見してとらはれ、死罪に、處せられたところである。

又一説には、女が始めての男にほれ男をこつそり逃がし目印にして居る。男の石枕を自分がして殺されたとも、いつて居るが、前者はその土地に傳はる情話であるので、それに従ふことにした。

あの地は二百五十余年前までは讀谷山間切になつて居て喜名番所以北は、隨分物騒な處であつたらしく、多幸山は老樹鬱蒼と生ひ茂つて、晝尙物すこく、旅客の一大難所であつたらしい、俗謡に

多幸くら山 追剝てんどう

喜名番所に泊らなやあ

女てるもん番所に泊ゆめ

急げそげ／＼、しまかからあ

(多) 幸山は追剥が出ると思ふから喜多番所に泊らうか、女が番所に泊つてはいかない、急げ

／＼早く我が村へかへりませう。

と歌つて居るのは、その消息を語つて居る。今の國頭街道を開いたとき、久良波のろ殿内の跡から、人骨が大分發掘されたとのことで、この傳説を裏がきしてゐるのも面白い。

琉球開闢の時天帝子の長女を君々の初めとし、次女を祝々と初めとした。君々は最高の神職であり、祝々は諸間切諸村の神事を掌る祝といふのは今でも地方には居る。

のろには祝地といふ土地を與へられてあつたので、生活には不安はなかつた。そのかはり公然夫を持つ事が出来なかつたので、内縁の夫で辛抱しなければなかつた

のろを妻にすると、云ふ様な事が、誰云ふとなく傳はつて、土著の人等は、近づかなかつた。それでのろは、外來者と多く關係を結ぶ様な結果になつた。それで零落でもして田舎山原に落ちて行く男は、のろの相手としては都合がよかつたわけで久良波關が撤廢されて失業すると、彼の男がのろ殿内にころげこんでゐたことも了解せらる

る。

久良波のろ殿内跡は、讀谷山村喜名より約二里北縣道國頭沿線で現今の温泉附近の地点といはれてゐる。

三〇、與座川の伊保

二十日許りも流連してゐる、與座親方は、昨日友達二三名と、與座川の邊まで、遠足する約束をしたのが、悔みられた。同じ勉強仲間の彼等を、無下に斷るのは、出来ない事ではあつた。しかも親方は彼等に誘はれて、初めて遊廊といふものを知つたし、彼れの愛人、伊保のつると、相知る仲になつたのも、彼等友人の案内で來たのであつた。

親方は起き上つた。未だ昨夜の酔が残つて居るやうに思はれた。遊廊の朝は流石にしづかで、ただ物賣りの聲が聞へるばかりであつた。

春未だうすい、裏座の火鉢には、鐵瓶がさら／＼と音立、美しい敵娼のつるが、にこやかに座つて居た。

親方は、ほんとに幸福だと思つた、つい二三箇月前まで、仲島遊廊も知らず、女といふものも知らず

只管書物と、首つ引きをして居た頃が、馬鹿らしかつた

「あなた、ほんとに、今日お友達とお出かけ？」

とつるに云はれると、又行き度くないなあと思つた。

その時三人の友人は、どや／＼と案内も乞はずに這入つて来た

「與座、さあ行かう。免に角うんと運動をして来て、歸りはこゝで御馳走になることにしやうではないか。」

仕方なく與座も一行に加はつて、高嶺間切をさして出かける事になつた。

野も山も若葉に包まれて、與座川の水は水晶の様に清らかに音もなく流れ、南山城下の景色はさすがに愉快であつた。

四人は川べりで酒肴を開いて、淡笑して居た。

その時一人の友人が歌つた。

澄みて流れよる與座川の水も

伊保のたゞまればにこりたちゆさ

親方は暫くじつと川を見つめて居たが

「わかつた、自分が悪かつた。許して呉れ給へ。君等の好意感謝する。」

總明な親方は、友人が自分の放蕩を忠告する爲に、わざ／＼こゝまで、連れて来た眞意がわかつたので

あつた。それから親方は、再び伊保に足向けなかつたとの事である。

歌意は説明を要しないが與座川と與座親方の姓とが意相通じ、伊保といふ樓名といほといふ土か意相通

ずるので、清い心の君も、いほのために濁つて、仕舞つたなと諷刺したのである。

親方は官職の名で位階は従二品、花は金柱銀の簪をさして居た、三司官座敷につぐ

與座は縣鐵米滿線高嶺驛で下車、四、五町上つたところにある。

三山分立時代南山城跡には南山神社がある。

三一、伊江島哀話

那覇から四時間、本部渡久地から四十分程發動機船にゆられて居ると、ローマンズの島、伊江島に到着

する。

伊江島の上原には、紫のりがとれる。紫のりは、本縣では、邊戸、久米島、殘波とこゝが産地である。

こののりには、悲しい乙女の、戀の話がある。

島の男女が、島の人同志の戀愛に満足して居る間は幸福であつた、がしかし島の娘 仲村柄まかては、隣り島の伊平屋の松金を知つてからは、一日でも會はずには、居られなかつた。

他郷の男との、戀愛は迫害されるのが例であつた。島の若者等に知れると、面倒なことになるので、まかては紫のりをとりに行つては、上原に行つた

男は又魚釣る眞似して、くり舟に乗つて、伊平屋島から通つて来て、海岸の巖かげで、戀の睦言をかはして居た。

丁度其の日、男はいくら待つても來なかつた。もう來る／＼と海に入つて居ると、とう／＼潮が満つて来て、女はとう／＼溺死したとのことである。島の人は歌つた。

上原のしせやとるものやあらぬ

仲村柄まかて波にもまて

(歌意、上原の紫海苔はとつてはならない、仲村柄まかては海苔とりに行つて波にさらはれて仕舞つた。

一説には松金とまかてと、會つて居るのを、島の若者共に發見され彼女は恥しきにたえず、入水したとも云はれて居る。

(伊平屋島は、伊江島の北方にある。尙圓王の出生地として又ローマンズの島として、しられて居る同島は島尻郡に屬して居る。

三三二、北山くずれ

今歸仁の城しもなりの九年母

しげま乙樽がぬちやぎさゝぎ

一般的には下の句が

しげま乙樽がぬちやいはちやい。

として傳はつて居るが、土地の古老は云ふてゐる

「しもないの九年母といふのは、若按司の事で按司の愛妾の、しげま乙樽が、大層可愛がつて居たことを歌つたものですよ」

と云ふて居る。子供を大層可愛がる、形容詞として、首里では、今でも「ぬちやぎさゝげ」といふ言葉を使つて居る。持ち上げ捧げの意味であろう。

北山の滅亡は悲劇であつた、北山王攀安知は悲しいかな、部將を知るの明がなかつた。本部大原の裏切で果敢ない最期を遂げた。彼れは武勇に勝れ、部下にも勇將が多かつた、その時の戦の有様が、萩堂口説に出て居る。

北山くづりのその時、本郎大原 今歸仁城に軍押し寄せ水ももらさず、とりよかこめば、按司の大將平敷大ぬし、屋倉のうへより、敵を見おろし、日頃手馴れし、五尺餘りの長刀打取、城門おしあけよ

られ／＼と立出大勢むらがり、集る中に、わつと飛入、人無き處を行くが如くに、たてさまよこさまきりよめぐれば、敵の軍勢、あらしに木の葉の、飛ぶが如くに、四方へさつと引き退く、天晴希代の名將神か佛かさて／＼／＼

北山くづれとは北山落城の事であるがそれには二つの傳説を生んで居る。一つは人口に膾炙してゐる今歸仁由來記で今一つは八月赤飯の由來になつて居る

今歸仁由來記は一寸今日の小説であるが、之には素材が中頭郡北谷村字砂邊に遺つて居て若按司の預けられて居た、寺の跡が、寺屋敷といつて未だにあるし、由來記の眞王津といふ女の出た家が、渡慶次小學校長喜屋武保撰氏の家になつて居ると、口碑に残つて居る。

今一つは按司の末子が乳母に伴はれて、現今の島尻郡南風原村字兼城に通れて成長して、兼城按司となり、内嶺城といふのを居城にした。

二人の娘を生んで、長女は尙圓王の側室にあがつたが二女は熱病で死んで、黄金森に葬られたが復活し一週間目に津嘉山村親國の下男、本部満名に助け出された。神職は、薄と桑で「シバル」を造つて、悪魔拂ひをして軒にさし、餅を作らうとつけてあつた米で、赤飯をたいて、祝つたのが、今に傳はる八月十

日折目の傳説である。満名は安平田の子と改名してその養子になつたが、按司の没後、離縁となつた安平田の子の後には今日の鄭氏で、按司の後が宇兼城一〇五番地の大城志良氏になつて居る。

砂邊は嘉手納線平安山驛で下りて、二三町海岸に下りた處にある。

今歸仁城は今歸仁村字今泊にある、名護から自動車の便がある。運天港と共に本村の名所になつて居る。

兼城は與那原線南風原驛から二三町の處で内嶺城は今一寸した茅毛としてのこつて居る。城らしい城ではないが、安平田が養子になつた祝ひに、牛を殺して振舞つた籠の跡がある。シバをとつた外間崎もある、最近まで尙家のシバは外間崎から、献上したし、八月十日には今に到る迄、内嶺城跡に集まつて、昔は牛を殺したが、今日では肉を買つて来て、御馳走することになつてゐるとのことである。

黄金森には次女が葬られた墓がある、按司墓といつて、南風原小學校の隣りになつて居る。津嘉山は糸満線津嘉山驛で下りた方が、便利で親國と云ふ豪農の跡は、今も現存する。

三三三、神谷と丸目かな

請人神谷は今度の科擧に、自分が一番で合格して居ると聞くと、流石に嬉しかつた。その頃琉球の子弟が勉強すると云ふ目的は最高の文官試験である、この科擧に見事パスしての役人になるのが目的であつた。御評定所

もう請人として、遠い田舎山原迄かけ廻らなくても、堂々と毎日首里城に出仕すればよい。

そらいふ境遇に置かるゝと思ふと、又過ぎ來し生活がなつかしまれた。

男振りのよい彼れ才氣に優れた彼れには、方々に宮童達との、戀のロマンスがあつた。

彼れは昨年久志間切汀間に滞在して居る時、戀仲になつた美しい丸目かなのことを、今考へて居るので

あつた。丸目かなはほんとに愛くるしい女であつた。

彼女には戀仲の男が居たが、神谷を知る仲になつてから、怡ど神谷について來たのであつた。

彼女は、先の男の復仇を恐れ、神谷とのあひびきの場所は、汀間村の入江を渡つて、隣村の安部との境になつてゐる、兼下の濱をえらんだ。

神谷が夕食をすまして、白い砂をふんで行くと、かなは待つてゐて小走になつて来ては、小供のやうにすがりついて甘い戀をさゝやいた。

茲沖繩の東海岸、うち寄する波の音も靜かに人の聲ともなく、月光冴えわたる夜そこには只二人の戀の情景がある許りであつた。

愈々首里へ歸ることになると女は自分も連れて行つて呉れと泣いた。

村外のひととの戀は、村の若者共に迫害されるのが例であつた。首里城下の土である。神谷には齒はたゝないがうす／＼二人の戀が知れてゐるらしい今日、女をのこして行くのは、神谷には不安ではあつた然しすぐ女を連れて行くことは科をうけねばならぬ身であつた。彼れの立場上來ないことであつた。女には明けての四五月頃迄待つて居れと、その間の事情を述べて置いた。

心あて隠す野邊のはなすゝき

二人が玉の緒のおしさあらば

(花薄よ情あつてかくしてくれ、吾等二人の命が惜しいと思ふならの意)

汀間と安部境の兼下の濱に

無藏とふやかれのものくりしや

(汀間と安部の境のかの下の濱で無藏(丸目かなのこと)と別れるのは大履苦しい。)

この歌は、その頃の彼れの歌であるが

今頃かなはどんなに暮してゐるだらうか、私の迎へに行くのを待つてゐるであらう。

こんな甘い思ひにふけて居ると、もう月は虎頭山の松の上にかゝつて居た。

彼れは彼れの門を過ぎる、若者等の歌にハツとした。

歌は意外にも、彼れと丸目かなとの戀をうたつたのであつた。

汀間と安部境の かねしちやの濱下りて

汀間の丸目かなと 請人神谷と戀の話

はやし(さあ、ふんぬい／＼誠かやあ)

神谷が云言葉 のんでいふたが

明けて四五六月 よはしが来ゆこと

つとめて待つちよれよう

はやし (さあ出かちやるやあひやう、丸目かな)

(歌意間と安部の境の兼下の濱で、間間の丸目かなと、請人神谷と戀の話をして居た。

(はやし ほんとか〜誠の話かなあ)

神谷は何と云つて居たか、來年の四五六月には連れに来るから、辛抱して待つて居なさいよ

(はやし 出来したねおい丸目かな)

この汀間節は面白いので、花の島から、うたひ出さ出ると、れう原の火の様に、忽ちの中に、首里那覇にはやつて仕舞つた。

その爲に、神谷は品行方正でないといふわけで科は落弟させられて仕舞つた。

この歌は二番科に當つてゐる某というのが神谷の久志間切での秘密をかき出し神谷を蹴落す爲に作つてはやらせたとは、後でわかつた。

請人とは食料品その他を首里城に納入する者で、品物購入のためによく田舎山原方面を巡つてゐた。

評定所は政府で庶務を總裁處理する處である。

神谷は鳥小堀の士で、請人などして居たから、可なり祐福に暮して居たやうである。彼れに關する逸話が今ものこつて居る。才氣煥發で頭がきれだが、世の輕薄者流ではなかつたやうだ。

彼れが十八九歳の時、先輩達が、組踊、忠孝婦人の合作をして居た。

大川城が落城して夫村原討死の報に接した村原の妻は、幼兒乙松と姑を連れて、落ちのびて行くが歩みなやむ姑の爲に、乙松を泣く〜も山路にすて、姑を介抱して旅をつゞけて行く。一方今歸仁に使ひに行つて居た村原が、主家の變をきいて急で舊る途中、我が兒の棄てられて居るのを拾ひ上げて、母と妻に對面する。

母は村原が主君に殉せず、おめ〜と生き恥をさらして居るのをとがめると事情をのべて、人質にとられて居る、幼君を取り戻して、敵を討つ計畫を語る。

「村原が生きち、此世界に居とて、思子取戻ち敵うたな置ちゆめ。あゝ思ひ世に残ち死にやなやべらぬ」と母に云ひ妻に、

「やあ乙樽いきやし乙松や捨てゝあたが」

と愛児を捨てた事を詰る。すると乙樽は

大川の城仕合せのときに、按司そひと共に、討死よてやり、語ひべのあれば、沙汰よ聞き及で、三人逃忍で、こま迄や来やすが、親加那志事や馴れぬ山路の、さくひらの疲れ足元もつまで、急ぢ急がらぬうかつとしち居て、敵に追ひつかれ、三人共憂目見だよりかともて、あはれ泣くゝも、すと親の爲に捨てゝあたぬ」

といふ台辭になる。其間姑はたゝぼんやり立つて問答をきいて居る。

神谷はそれを見ると直ぐ

「姑は老ひぼれだゝ」と野次つた。

作者達も考へて見ると、成程此間に姑にも一言云はさなければならぬのに氣がついた、がしかし適当な台辭が見出せない。

では今の若いのに聞かうと神谷をよんで「批評した以上君には考へがあるだらう、何としたらよいか」「ときくと神谷は即座に村原の台辭の次に

「咲出る花は、我身に思かへち、何の肝のあとて捨てゝあたが」

と姑の台辭を入れてやつた。そんなことから認められ、とうゝその後には彼れの表座敷で創作をすることになつた。丁度組踊りは進行して

「若按司を取り戻す爲に村原の妻乙樽が、單身敵の谷茶城へ乗り込むと村原は乙樽の消息を案じて、小間物賣りに變装して行く途中、乙樽の使者、泊と出會ふ、泊は谷茶城の状況を話す。

其の言葉に、尤も縁の近い親類といふ言葉を使はねばならぬが適當な語句がない、一同困却して居ると神谷が手をたゝいて、飛んで來た。

「御神一つの近親類はどうです。」

といふので、一同そうだゝこれは感心々々と大喜びをした、それは神谷の宅へ、その日神拜みに來た。久高島の人の談話中から、この語をひき出して使つたのであつた。

(組踊は尙敬王の即位七年(今より二百年前)中山傳信録の著者除葆光等が、冊封使として渡來した時、中秋の宴に、首里城内で演じたのに始まる。

作者は、王城朝薫で琉球の神話傳説に材をとり能樂等を参考にして

酷刑子、執心鐘入（中城若松） 二童敵討

孝行の巻 女物狂

の五組を創作した。

其の後冠船毎に演ぜられ慶應二年迄続いたが、役者は總べて國の役人で、實に國劇といはるべきものであつた。組踊は作者續出して百に近いといはれてゐるが、忠孝婦人は手水の縁、花賣の縁等と共にレコード等にも吹き込まれて、今日の大衆にも喜ばれて居る。）

彼れは又義侠心が強かつた

彼れの村で一二を争ふ酒造家の主人が死んだ、主人の長男は未だ、一二、三歳にしかならないので主人の弟が家督相續することに、親族會議で決定した、勿論親類連中に二男が、買収してあつたのである。富豪の事だから、會葬者は延々長蛇の列をなして居るし村の人々も道側に大勢列んで、見送つて居た。神谷もそこに來合はせた、そして事情を知ると飛び出して行つて、喪主になつて行く二男を側におしやり後から抱かれ行く、長男を自分が抱き取り喪主の位置に長男を置いて墓場まで行つた。勿論二男の野望を遂げしめなかつたとの事である。

こう云ふ人間にあり勝ちな人の通弊として我が強かつた話。

神谷も老境に入つてからの事であるが、時は尙育王の治世、國王御病氣のため、元旦の拜賀式は二、三年中止されて居たがその年は全快されたので、元旦は首里那覇の人民も大喜びで、朝の御拜は非常に盛大に行はれた義村王子は感激して詠じた。

御萬人のまぎりちゆいさだりさだり

こんど元旦や常にかは

（今年の元旦は常にかはつて人民が一人前になり前になりして大そうにぎやかであるの意）

彼れと仲のよい友人が、自分がこの歌をよんだといつたら神谷はきつと、けなすに違ひないから、その時困らしてやらうと神谷のところへ行つて、この歌を披露して、自分の歌も今度は出來てゐるだらうと云ふと神谷は友人の思つて居る通り、けなした。

友人は得たりと、その歌は實は、君が崇めて居る、義村王子の歌だよと云つても一向平氣である。

義村王子の歌はよい、然し君の様な小人の口から出るといけなないと、負けては居なかつたと云ひ傳へて

居る。神谷のこれらの逸話によつて、彼れの性格が、當時の社會に容れられず、且つ白眼を以て見られて居た。三個人（崎山、赤田、鳥小堀の住民）であつた等の遠因も戀愛事件以外手傳つて、科擧不合格の結果になつたこともうなすかれる。彼れの崇拜してゐる義村王子は歌をよくし、和歌もよいし琉歌もよかつた。

語らても互に言葉や残て

うびじ 曉の鳥やなきゆさ（曉節）

（語つても／＼も互に話は残つてゐるが、おぼへずも 曉の鶏がないて居るの意語らても互に言葉や残ての表現琉歌ならではと思ふ）

たると語らてもすにゆる身どやしが
いきやしがな肝のそはぬ中や（仲間節）

（誰と語つてもよい身であるが心がそまない中はどうしても、ほんとうの心をうちあけて、しん

みり語る事は出来ない）

肝の梶しちゆて渡る身が舟や
語情吹風いちごたのむ（仲村柄節）

（歌意 教訓歌参照）

心あてみかけ脳中のかどみ
ものゝかけうつすたからだいもの（仲村柄節）

（歌意 教訓歌参照）

いづれかれよしの御願叶はとて
佳例吉の美風眞體おしみさ（かきかて風）

（いづれはみんなの事かれよしは芽出度いこと。皆芽出度い御願ひがかなつて芽出度い眞體をおすの意）
等が歌集に出て居る。

義村王子と本部按司とは歌詠み友達で隣りどうしでもあるし、仲がよかつた然しどうも本部按司には一目置かねばならなかつた。一日歌の勝負をして見やうと思つて、本部按司のところに掛けて見ると、按司はうたゝねをして居た。

王子は庭の梅の小枝を打つて疊にさして歸つた。すると間もなく、本部按司の使者が、梅の枝に短冊をつけて持つて來た。

ねざめおどろきにたが袖よとめば

庭になく梅のしふらし匂ひ

(歌意 本部按司の戀参照)

やはり琉歌は本部に及ばないとその後和歌に精進したとのことである。

附記

此の傳説は神谷と丸目かなが兼下の濱で戀を語つて居るのを、彼れの以前の戀人がかぎつけ、從弟と相談して、復仇の爲に、あの歌を作つてはやらせた様に傳はつて居るが、私はこの傳説を久志でたづねてもわからないので、更に同村出身の友人に手紙で照會したら折返し左の返事が來た。

前略時に御依頼の丸目加那の件久志村には餘り傳説として傳り不申却つて首里那覇にてよく聞く事有之候へば左様御承知被下度それの子孫として、生存せる者も無之候この傳説は未だ、百年前後にしかならない、首里の神谷のことを調べたら、以上のことがわかつたわけである。

汀間は久志役場より北半里に足らぬ部落であるか、部落は福樹の生垣で道路井然と如何にも美しく落ちついて居る、戸數八十位の部落である。

三四、許田の手水

男が許田の手前、幸喜に來た頃は、もう陽は大分傾いては居たが、かん／＼照りつける、眞夏のこと、衣裳はすつかり、汗びつしよりになつて居た。

首里から名護は二日の道中で、昨夜前兼久に泊つた。旅宿の夜も珍らしかつた。なごやかな恩納や名護の連山、さら／＼と白い砂に音つれる小波も美しかつた。

許田にさしかゝると今のやうに許田橋はなかつたので、右に折れて許田の入江をぐるりと廻らねばなら

なかつた。男は吸ひ寄せられる様に近づいた、そこには旅人誰でもが戀したふ、水の音がして居た。上には、鬱蒼と雑木が生ひしげつて、居る。大きな岩の間からこんこんと、清らかな水が湧いて居てそこには美しい宮童が、桶に水をためて居た。男が水を飲み度いと云ふと、乙女は、いつも自分等が、捺つて飲むやうに、水を両手ですくつて男に飲ませた。

男はうれしかつた。男女七歳にして席を同じうせずを、金科玉條とする首里で生れて、首里で育つた彼れには全く別の天地に來たやうに思はれた。

男は首里の話や旅の話をした。女は村の話等をした。夏の日はもう西の海にしづんで仕舞つた。男はとろ／＼女の家で泊る事になつた。

こゝは戀をするに、ふさはしい山原である。二人の戀の花は眞紅に咲いた。女の家はませど屋と云つて今も許田にあるが、男の名前等は傳はつて居らない。

この故事を歌つたのが數首ある。

馬よひきかへちしばしむち見ぶしや

音にきく名護の許田の手水 (恩納節)

(歌意) 馬を引きかへして一寸行つて見度い名高い許田の水手を)

面影よのこすむかしこの川に

縁の水くだる無藏が手ぶり

(歌意) 昔この川で男女の縁を結んだ、女の手水をしたその手振りの面影がのこつてゐる。

れいに、水ためを作つて昔の面かけは薄くなつて居る。が然し湧き出る水量が少いから之も止むを得ない事であらう。手水川の入口にはヘゴで作つた唐獅子が立てゝあるのは面白い。筆者の行つた時には美しい乙女は居ないで上の雑木林には、四歳位の女の兒が一人、笑つて座つて居た。

ませど屋は榊取屋で榊取は上納米をはかる者のこと、此の屋號は各地にある。その頃は米は一坪榊ではかり居つたが、榊取りの上手なものになると、一寸役人が與所目でもすると、はかり手振りをして、榊を引つくり返したりしたと云はれてゐる。

三五、久米島乙女

鳥はうたるとも未だ夜は深し
心しづかに寝て座れ

和語と琉語と、ちやんぼんになつた、この歌は古い時代から久米島の宇江城に、傳はつて居る。歌意は、鳥はなくとも、未だ夜は深い、心靜かに寝ておいでなさいといふことである。いつの代であつたか知らないが若い薩摩隼人が久米島に漂着したのであつた。山美しく、水清らかな 久米島である。

白瀬走川に流れよる櫻

すくて思里にぬちやいはけら (白瀬走川節)

(思里とは女より男をよぶ愛稱、白瀬走川は久米島にある川、井戸に川といふので川には走川と
すよ。)

赤米貫花や里に打ちはきて

白米ぬき花や寄しれ童へ

(赤米に貫いた花は、里にかけてやつて、白い糸を貫いてから花は集めなさいよことも等よの意
味し、白米は純潔を意味する。)

こういふやさしい心の持主が、島の乙女である。隼人はとうとう、宇江城の宮童と戀におち、愛の巢を作
つた。

男は歸らねばならぬ、時が來た。二人は泣いた。そして出發の前夜は、あまりに短い夜であつた。
免に角、女は戀愛が生活のすべてである、然し男にはそれ以上のものをもつて居るのが人の世の常であ
る。

鶏のなく聲をきくと男は、起き上らうとした、女は男を押へて、歌つたのが上の歌である。
別れを惜しむ歌は可なり多い。

鳥やうたうたらはも夜や明けて呉るな
稀の手枕の語らひだもの (干瀬節)

(鶏にわとりはないてもよいが、夜よは明あけて呉くれるなよ、稀まれに手枕てまくらをして戀こひを語かたつて居ゐるんだからの意い)

たまさかのこよひ鳥とりはうたらはも

しばし明雲あけくものなさけあらな (干瀬節)

(稀まれにあふ今夜こんやだから、雞どりはないてもよいが、明雲あけくもよ情なさけがあつて、夜明よあけさせぬやうにして呉くれ)

語かたらても互たがひにい言葉ことばや残のこてうびじあかつきの鳥どりやなきゆさ(曉節)

(語かたつても／＼も話はなしはつきない、覺おぼえず曉あけづきの鶏にわとりがないた。語かたらても互たがひにい言葉ことばやのこのこての表へうげん現げん琉歌りうかならではと思おもふ。)

三六、萬座毛

波なみの聲こゑもとまれ風かぜの聲こゑもとまれ

首里天加那志美御しゅりてんかなしみみき拜まがま(邊野喜節)

(波なみの聲こゑも止とまれ、風かぜの聲こゑもとまれ、首里天加那志(王様)の御顔かほを拜まがみませう。顔かほには御みきといふそれに敬稱けいしやうをつけて美御みみきといふ)

詩人しじんの感情かんじやうは何物なにものをもさえざるものはない。尙敬王萬座毛せうけいばんざもうへ行幸みゆきのとき、我わが恩納おんななべが歌うたつた有名ゆうめいな歌うたとして人口じんこうに膾炙くわいしやして居ゐる。

萬座毛まんざもうは恩納役場おんなやくばの東方三町位とうほうさんちやうぐらいうみべの海邊うみべにあつて美うつくしい芝生しばかであほはれた廣ひろい毛もうは、萬座毛まんざもうの名なにそむかない、小松原こまつらには、恩納村有志おんなむらいうしの立たてた、歌人恩納ナベかじんおんななべ紀念碑きねんひがあつて、裏うらには上うへの歌うたが刻きざんである。

恩納岳おんなだけは、萬座毛まんざもうから見みると、京きやうの東山ひがしやまを見るやう様に、柔やわらかな曲線まがまがせんをもつ、女性美じよせいびの山やまである。

北きたを眺ながめると、名護本部なごもとの山やまが横よこたはり遙はるか洋上やうじやうには伊江島いゑじまが、美うつくしく立たつて居ゐて、風景ふうけいが實じつに雄大ゆうだいである。

萬座毛まんざもうなくば又恩納またおんななべなくばこの歌うたも生なれなかつたらうとは、誰たれでもが思おもふことであらう。

恩納なべの歌は雨宿りしてに出て居る。沖繩隨一の女詩人であるだけ、彼の歌は余りに有名である。此谷眞牛が本部村伊野波、恩納なべが恩納、よしやも古讀谷山といふと、今の恩納村で、女流詩人がそろつて、山紫水明の、國頭郡であるのは、面白いことである。

三七、花の島

仲島の遊廊は、一番古い所謂花の島であつただけ可なりに多く歌はれて居る。

仲島遊廊が渡地遊廊と共に、現在の辻に合併されたのは、明治四十一年頃と記憶して居る。

舊王朝時代は、旅館も料理屋もなかつたので、遊廊が、之等をみんな兼業して居たわけである。

従つて高貴な人も出入するし、親類以外の女とは、話す事も出来なかつた、當時としていろいろな意味

に於て遊廊が繁昌したのは無理のない事であつたらう。

遊女も今日のやうに只金の對象としての男といふのでなく將來といふことに期待をかけて、よばれる者

が多かつた。それは傳説としても、遊廊通ひをして、破産した話よりか、遊女に援助されて、科擧に合

格した話の人口に膾炙するのでも詞はれる。

屋嘉部親雲上といふ人は、度々科擧に應ずるけれども、どうしても合格しない。八、九年後髪に白いのが交る様になつて、とう／＼斷念し、北谷間切の小役人になつて居ると、偶然彼れの敵娼に會つた。屋嘉部が座敷へ上れといふと、

「貴郎は將來見込のある人間と思つて居たが、田舎の小役人で満足して居るとは意外だ。そんな意氣地のない方には御目にかゝりませう」

と座敷にもあがらず、さつさと歸つたので、これに刺激されて勇猛心を出し直ぐ小役人をやめて、首里に赴き科擧に應じて合格した。

泊山里は鹽たきをしつゝ、夜は線香の光りで、勉強して居た。師の處へも、他の弟子達の歸つた後夜間通つて居た。師が山里を賞讃するので、他の弟子共は之を嫉んで山里が一枚ある著物をせんたくして干してある時いやがる彼れに著物をかして、花の島へ連れて行つて色々の侮辱を與へるのを、一遊女の義侠で、自分は山里の敵娼であると名乗り反對に友人等をやりこめる。之が機縁となつて、二人の仲に戀が芽ぐみ、女は山里を援助してとう／＼科擧に、合格することが出来た。之等が先づ代表的の話である。

遊女の中には、よしや思鶴が、歌人としても名が知られて居た。

いつしなのくちゆが戀路しやる人の

よしや仲嶋の浦に残て (仲村柄節)

(歌意) 一つの世に名が朽つることがあらう、戀をした人のよしや (わけ又は話しはといふ事をよしやの名と相通するのでかくいふ) いつまでも仲島の浦に残つて居る。

よしやの事はよしやと蟻螂のところにも書いたが彼れの戀人の、仲里按司といふのは現存の仲里御殿ではなく今の玉川御殿の祖先である。

仲里按司と云ふのは、仲里間切の領主と云ふわけで姓ではない。領地が具志川間切に變更すると今度は具志川按司となるわけで、個人の系圖にも、澤山例がある廢藩置縣の時に、領地の名が姓となつたわけである。

仲里按司の跡、即ち玉川御殿の一門の口碑によると、

按司は、首里の御殿へも、こつそりよしやを連れて來ては、二人の戀を楽しんで居たやうだ。

按司の奥方が、かぎつけて歌つた。

世界やふりものいあかり屏風立て、
花や押しかくち匂ひやちやしゆが

(歌意) 世の中は馬鹿ではない、あかり障子や屏風等を立て、顔は見えないから、わからないと思ふが、その匂ひはかくされんではないか、よくわかつて居るとの意)

よしやは返歌をした。

一夜宿かたる鶯やだんす
能羽振りたて、今ど飛びゆる

(歌意) 一夜の宿をかりた鶯は、羽をひろげて、今飛んで行くのである。

といふて出で行つたと、いひ傳へられて居る。
その頃の遊女の心持は詩的であつた。

まれの御行逢やすが言葉のかなしや
肝からがやゆら縁がやゆら

(御行逢はウイチエと發音す稀に御あひするのだが御話をきくと可愛い、ほんとに心からのこと
であらうか又縁といふものであらうか)

里やなりふじの姿といめしやい
わ身やしなさけのゑんどたのむ

(殿方は只顔や姿の美しい女をよばれるし、妾は只其人の心からの愛を頼んで居る、と遊女のか
なしい境遇をうたつて居る)

かしらゆいかはち赤糸帯しめて
わ身列てお旅いまひやならね

(あなたは旅に出られるといふが、髪を結びかへて、赤糸帯をしめて、男の様に妾を列れ

て旅にお出になるわけにいきませんか)

美ふところ明てわ身かくち給ふれ
御船登て里が住所拜ま

(御船はウニと發音する、懐をあけて私をかくして下さい、御船に登つてあなたの御住所を見
ませう)

里前御船送て戻る道すがら
ふらぬ夏雨のわ袖ぬらす

(里前御船を見送つて歸る途中、悲しくて悲しくて、降らぬ夏雨即涙で袖をぬらした)

思弟ちや部揃て願やしゆれども
よそしちも里前願て給ふれ

(きやうだい達が集まつて、願かけはしてあるけれども、どうぞ、それ以外、貴郎でも願つて下さる。)

拜みぶしやしちをて拜だことさらめ
拜みつめなげな夢よともて

(歌意、あひたくて、御會ひしたら見詰めて居つゝもほんとのやうな氣がせんで夢の様である。)

是等の女らしい、真情の流路した歌は、花の風に出て居るから、取り出したが、情緒てんめんたる、遊女に接しては、男が足繁く、通つて居たのも、無理はなかつたらう。仲島は今の下泉町にあつたが随分淋しい處であつたらしい。

聞ば淋しさや仲島の浦の

友よびやい鳴る夜半の千鳥 (仲村柄節)

(仲島の浦の、友呼び交して鳴く、夜半の千鳥をきくと、ほんとに淋しい。)

波に音そへてたるよびやい鳴が

哀れ仲島の浦の千鳥

(波の音と共に、誰をよんで鳴いて居るのか、哀れに淋しき仲島の浦の千鳥よ)

仲島の浦といふのは今の縣鐵那覇驛の構内で、近年あつちは埋めたたのである。仲島には陽物崇拜の、御嶽がある今もあく現存するが、あの近所に仲島小缸といふ、小さい缸がある。

曉のわかれ袖に波立て

仲島の小缸渡りぐれしや (仲村柄節)

(曉の別れは悲しくて、仲島の小缸を渡つて、歸るのは名残り惜しい。)

夢路通はしゆる仲島の小缸

さめて面かけのまさてたちゆさ (宣野灣王子)

全上

(夢路を通して居る仲島の小紅は、夢がさめては更に、面影が立ちまざるの意)

仲島には小堀(池)がある。今もあるが埋められて大分小さくなつて居る。

仲島の小堀千尋たちゆい

おれよりもふかく思てたほれ(惣慶親雲上) 全上

(仲島の小堀は、千尋も深いだらうが、それよりも深く、愛して呉れ)

終りに遊客と遊女の歌を書いて見やう、何れも述懐節に出てゐる。

戀路忘れよる年あらしゆて

うらめしや義理に別るとめば (與那原親雲上)

(戀路を忘れる年ではないが、義理故に別れるのはうらめしい事だ)

思ぬゆへからと義理にことよする

かくれ細道のあらなおきゆめ(しはあんまめ)

(愛しないから、義理だなんと云ふのであつて、かくれ細道、即ちかくれて會ふ方法があるではないか。)

よしまれんともて袖とやいなきも

きやしゆがまゝならぬ浮世だいのもの (我謝親雲上)

(止めようとして、袖をとつて泣いても、自由にならない世の中だものどうすることも、出来な

いではないか。)

御衣の袖とやいわがよしめなげな

きやならはもともて捨ていまひめ (じゆんしんのあんま)

(歌意、御衣の袖をとつてまで、妾が止めるのに、貴郎は、妾はどうなつてもよいと云つて捨て

三八、雨宿りして

(琉歌と地名)

私は四年の始めから、私の小さい著書である、沖縄昔噺の宣傳や講演に、國頭を振り出しに、本島内各地を行脚した。

丁度其月の半ば頃、羽地村伊差川で、にはかに雨に降られて一民家に雨宿りをさせて貰った。主人の四方八方の話の末、眞喜屋までの、道程をきくと直ぐ

名護からや羽地伊差川や一里

眞喜屋兼久までや二里のつもり

の琉歌をひいて、新道が出来て今はそうまでないと答へた。私は面白いと思つた。單に地名をよみこんだだけで、藝術價値のないものでも、その土地できくと情味がある。

歌意は、名護からは、羽地伊差川まで一里眞喜屋兼久までは、二里のつもり(計算)である。

地名をよんだのは、琉歌に可なり多い、首里から那覇及その附近から羽地迄を取り出して見るのも面白い。

首里附近

あやぢやう

上下のあやぢやう關の戸をさゝぬ

をさまるとる御代のしるしさらめ (かきやて風)

(あやぢやうは首里城門前の、大通りを云ふ。上には守禮門が、今も現存するが。下のとりといふ中山門は、今はないが二十余年前まであつた。兩方とも關の戸をたてないのは、治まつた、御代のしるしであるとの意味である。

中山門は首里の第一坊で、明の宣徳三年に、欽差正使柴山が、五百余年前尙巴志を冊封したとき、中山といふ扁額を携へて來てかけてあつた。

明治三十八九年頃まであつたが、いつの間にか中山門と共にとり去られて仕舞つた。嗚呼中山門の一文が、沖繩新聞に出てゐたのを、未だ私は記憶に残つて居る。守禮門は第二坊で、明の嘉靖七年尙清王冊封の時の創建で、初は待賢の二字をあけてあつたのを中頃首里に改め、冊封使の來る時に「守禮之邦」をかけたが、其の後我寛文三年尙賢王以來「守禮之邦」の大額をそのまま掲げて置く事にしたとのことだ。

圓覺寺

圓覺寺御門寺の鬼佛加那志

わ無藏横しゆすやおどち給ふれ (垣花節)

(圓覺寺は、明應元年尙眞王父尙圓王の爲に建立した巨刹で、臨濟宗寺域千八百余坪であるわ無藏とは、我愛する女の事横しゆは横どりすることである。圓覺寺には、山門に仁王尊が立てゝある。こはい顔つきをして居る。鬼佛は仁王尊のこと。仁王は佛法守護の二神の稱で左輔を蜜迹金剛、右弼を那羅延金剛と稱して居る。又金剛神とも云ふ。仁王尊どうぞ私の愛する女

を、奪ふものはおどかして下さる)

末吉

末吉の開鐘がねや首里のかいちやうともて里起ちやらちわ肝かゝて (曉節)

(末吉は、シイシと發音し、開鐘はケエジヨウと發音す。末吉の萬壽寺でつく曉の鐘を、首里のあけの鐘と間違つて里(愛する男、女より男に云ふ)を起して歸してやつて心にかゝる。末吉には萬壽寺といふ寺があつて、その附近丘へ上つた處に尙泰久王時代天界寺の鶴翁和尚の勸進になる、社壇神社がある。景色のよい處であるが、今は興廢して居る。萬歲敵打口説に、この界限の景色をうたつてあるが、萬歲兄弟に討たれる高平良おさしの屋敷跡は、平良に高平屋敷といつて遺つて居る。そこで萬歲口説を歌ふと縛されたようになって、身体が自由がきかなくなると云つて、著者の子供るときには、おそれられたものである。萬歲敵討は單なる戯曲ではない。時代は明かでないが、御鎖側(財務官)を勤むる高平良と

云ふ人があつた。矯豪な性質で、職權を笠に著てよくない行ひが多かつた。その頃大謝名の比屋といふ者が、駿馬を求めて乗つて居るのを見ると、その馬が欲しくなつて何遍も彼れに譲渡方を交渉したが、正直一途な大謝名は、可愛い我愛馬を他人の手に渡すことは忍びず、高平良の請を徹頭徹尾断つた。無道な高平良はとう／＼大謝名を恨むのあまり、使者をやつて彼れを毒殺した。其子謝名と普天間に僧になつてゐた慶雲二人の兄弟は協力して高平良を討つて、父の仇を報じたとのことである。その子孫はとう／＼平良に居たゝまらず、山原落ちをしたとのことで、現在大宜味村字渡野喜屋にはその子孫といふのが遺つて居る。

萬歳口説

親のかたきを、打たんでゆり、萬歳姿にうちやつれ棒と杖とに太刀仕組で、編笠ふかく顔かくち、忍び／＼に立ち出て、村を里を越えくれば、平良やしのぶ敵の門、兄弟しり目に見過して、うしろの道に廻りきて、ゆく末吉の御神に、祈る心は我が敵に急ち引合ち給ふれてゆり、登て社壇に願立て眞南に向ひてながむれば、きいと慶良間の渡中には、海土の釣舟漕ぎつれて、沖のかもめと見まがふや、それ

からくだり／＼来て、ゑい御寺御門に立ちよやい、休むすがたやよそしらぬ。

崎山御殿

拜でのかれらぬ首里天ぎやなし

遊でのかれらぬお茶屋御殿 (茶屋節)

(拜んで去り難いのは首里の玉様で、遊んで去り難いのは、御茶屋御殿であるの意)

崎山町王様の別荘で東苑ともいふ。苑中にある一亭御茶屋御殿は、茶道職を置いて居たとのことである。

虎頭山

虎頭山出る秋の夜のお月

くもりないぬ御代のかぐみさらめ

(虎頭山から、出る月が美しくすみ切つて居るのは、くもりないよく治まつて居る大御代のかぐみ)

みであるの意)

安里八幡

安里八幡の松だきゆるおそく

おれが露たいはど里とのかれらぬ

(歌意、安里驛から二三丁許りの處に尙徳王建立になる、八幡宮がありその隣りに神徳寺がある。そこには松をだいたウスクの木があるがその露をすふと、里と別れることは出来ないの意)

上り口説 (首里より鹿兒島へ)

旅の出立観音堂

黄金酌とて立別る

大道松原歩み行く

美榮地高缸打渡て

千手観音伏し拜で

袖に降る露押拂ひ

行けば八幡崇元寺

袖を連ねて諸人の

行くも歸るも中の橋

連れて別ゆる旅衣

船の纜とく／＼と

風や真艦に午未

招く扇や三重城

伊平屋渡立つ波押しそひて

七島渡中もなだやすく

佐多の岬も走り並で エイ

あれに見ゆるは御開門

富士に見まがふ櫻島

沖の側まで子兄弟

袖と袖との露涙

船子勇みて真帆引けば

又も巡り會ふ御縁とて

残波岬も後に見て

道の島々見渡せば

立ちゆる煙は硫黄島

1、観音堂、現在電車停留場の上にある。千手観音を祭つてある。風景絶佳の勝地で

旅行の時には必ず参拜したものである。元和四年今より三百余年前尙豊王、慈眼院と同時に創建したものである。

2、崇元寺、現在那覇市にあり四百六十余年前尙圓王の創建になる。五つの石門が並んで居

る。琉球開闢以來國王及代々功臣の靈を祭つてある。代々國王の位牌と並べて俗に勳功様といふ「代々功臣之位牌」といふのが安置されてある。

3、中の橋、通堂にある。

4、沖の側、沖の寺の側で、沖の寺は眞言宗臨海寺のことで築港棧橋の構内になつて、今榕樹のあるのは、其の境内であつた。

5、三重城 尙清王(三二三年前)の時に築いた砲台の跡で、船の見送りによい場所である。

6、残波岬 中頭郡讀谷村になつてゐる、風景壯大な處である。

7、七島渡 中は七島灘のことで、那覇鹿兒島航路で尤も波の荒いところである。

8、御開門は鹿兒島縣の開門嶽の事

此口説は百五十六年前に死んだ屋嘉比朝寄氏の作といはれてゐる。

那覇附近

那覇港

舟に掉さして月に歌うたて

あそでおもしろさ那覇のみなと (中城はんた前節)

住吉

月やあまくまにながめてどむちやる

浮世住吉の秋の今宵 (久仁屋節)

(月は彼地此地で眺めて見たが、住吉の秋の今宵が一番よい。浮世といつて、住みよいと、住吉の地名とかけてある。)

三重城

三重城に登てうち招く扇ぎ

又も巡りきて結ぶ御縁 (花風)

三重城に登て手巾持上れば

早船の習や一目で見ゆる (稻まつむ節)

(三重城はグス一目はチュミと發音する)

落平

落平に通て水とゆる舟の

歌のおもしろさ那覇の港 (久仁屋節)

前の濱

前の濱に／＼雪雨のふゆい。雲雨やあらぬ雪の眞米

渡地の／＼浦波の濱千鳥、友よぶ聲は

ちり／＼やちり／＼。

前の濱に／＼ちり飛る濱千鳥、友よぶ聲は

ちり／＼やちり／＼。

渡地の／＼漕舟の、ろの音かゝらりくる聲は

むきやいきちやい (前の濱節)

(歌の意味はとく必要はないが、渡地前の濱は出舟入舟が、絶えなかつた。がしかし、濱千鳥を驚かすまでの殺風景な繁昌振りでは、なかつたのがよい。)

大門前

大門道すがら聞けば琴の音の

月におもしろさ大瀬あたり

(大門道を月夜あるいて居ると、大瀬前あたりから、琴の音が聞えて來るとの意だ今では埋立て

られて、昔とはかはつて居るので、一寸不審に思ふかも知れない。

琴の音は、當時の仲島遊廊で弾じたものであらう (花の島参照)

内兼久山

いそぐ道よどで見える程も清さ

内兼久山のはじのもみち (恩納節)

泊高とまりたかほしに銀簪ぎんざん落ち

いつか夜のあけてとまいてさすら (民謡)

泊高とまりたかほしに銀簪ぎんざんを落したおとしが、いつ夜があけて探してさすだらうかの意い

中頭なかがみ及國頭くにがみ

小こ灣わん

情なさけ思おもゆらば我わが行いくる先さきに

向むかへて枝えださしよ小灣こわん小松こまつ

(情なさけをしるならば私わたしが行く方ほうに向つて枝えだを出せよ小灣こわん小松こまつ。平敷屋朝敏へしまさやうびんあじやこうが安謝港あじやこうで斬きられる時とき辭じ世せいの歌うたと云いはれて居ある。小灣こわんは風景ふうけいのよい處ところで、別莊地べつそうちになつてゐる。)

謝じや名な

豊とよむ謝しよ名なむりが謝じや名な上原じやうげんのぼて

きやげたる露つゆの玉たまのきよらしや (作田節)

(歌意かゐげらいを座敷参照)

宇地うぢ泊とまり

宇地うぢ泊とまり眞砂まごこてだどまぎらしゆる

御月おつきまぎらしゆる濱はまのまさご (宇地泊節)

(宇地うぢ泊とまりの眞砂まごこは日ひや月つきの光ひかりをまぎらす程ほど眞白ましろくしてきれいであるの意い)

大おほ山やま

大おほ山やま平松ひらまつや技持わざもちちのきよらしや

大おほ山やま宮童みやどうの手振てふりきよらしや

(解不 要)

比謝 証

頼む比謝証や情けないぬ人の

我身渡さともてかけておきやら (よしやと蟻螂参照)

喜 名

田幸暗山追割てんどう

喜名番所に宿らなやあ

女てるもん番所に泊ゆめ

いそげそげ／＼島かゝら (民謡) (久良波のろ殿内参照)

金 武

くばや金武くばに竹や安富祖竹

やねやしらかきにはやり恩納

(くばは金武からとり、竹は安富祖からとり、ほねは志良垣で作り、はるのは恩納にしようといふ
様な意で、琉歌集中、頭韻法を有効に使用した点に於て、おもしろい歌である。

恩 納

さき年にかはて恩納村はづれ

道はさで松の並だる清さ (恩納節)

(先年とかはつて恩納村外れの、道側に並べて松がうゑてあるのは美しい)

恩納松下にきじのはひのたちゆす

戀しのぶまでのきじやないさめ (恩納なべ) 卷首参照

恩納嶽あがた里が生れ島

森もおしのけてこがたなさな (恩納なべ) 全 上

恩納嶽のぶておしくたり見れば

おんな松金が手振りきよらさ (恩納なべ)

(恩納嶽に上つて見下ろすと、恩納松金の手振りが美しい)

地頭代主したり前御取次しやべら

首里がなしみやだり夜晝もしやべん

あまんよのしのぐ、おひるせめしやうれ (恩納なべ)

(琉球では上代から、しのぐと云ふて、オモロや、歌に和する、極簡単な踊りがあつたものであ

つた歌の意は地頭代(間切領主、地頭に代つて、間切の行政を司る役人)主したり前(敬様)

に申し上げます、首里の王様の御奉公は、一生懸命に働きますからしのぐは御禁止なされんで

許して下さい)

あねべたやよかてしのぐしち遊で

わすた世になればおとめされて (全上)

(姉さんだちの頃には、うんとしのぐ踊をして遊んで居たのに、われ／＼の時代には、禁止されて仕舞つた。前の歌と共に、しのぐを禁止された事に不平をもらしてゐる。今でも、地方では踊るといふ事は乙女等無二の楽しみにして居る。この踊りが爲政者の都合で、やめられたので、彼女等はほんとに淋しかつたであらう。

首里みやだりすまち戻る道すがら

恩納嶽見れば白雲のかゝる

こひしさはつめてみぶしやばかり

(首里の御奉公をすまして、戻る道すがら、恩納嶽を仰ぐと、白雲のかゝつて居るあの山の下には戀人が居るが戀ひしつづけて居て只もう會ひ度い許りであるの意)

許田

馬よ引きかへちしはむぢ見ぶしや

音にきく名護の許田の手水 (外四頁、許田の手水参照)